

箱崎 40

— 箱崎遺跡第62次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1093集



2010
福岡市教育委員会

箱崎 40

- 箱崎遺跡第62次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1093集



遺跡略号 HKZ-62
調査番号 0825

2010
福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから東アジアとの対外交渉、文化交流の窓口として発展してきました。このような歴史環境のもとに、市内には数多くの史跡や文化財が残されており、本市におきましてはその保護と活用に努めているところです。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によりやむを得ず失われていく埋蔵文化財もあり、これらについては事前に発掘調査を実施し、記録保存を行っています。

本書は、東区馬出5丁目における都市計画道路馬出東浜線建設に先立って行われた箱崎遺跡第62次調査の記録の報告書です。本調査では、平安時代から江戸時代に至る集落跡や墓地跡を発見しました。調査地点は筥崎宮を中心に関開する中世都市としての箱崎遺跡の南西側縁辺にあたりますが、本調査により明らかになった中世から近世にいたる土地利用の変遷は、箱崎地区の歴史を知る上で重要な資料になるものと考えられます。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用して頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施について多大なご協力をいただいた道路下水道局をはじめ、現地にてご協力をいただいた妙徳禅寺をはじめとする近隣の皆様など関係各位の方々に対し、心よりの感謝の意を表する次第です。

平成21年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は、福岡市道路下水道局の委託により、福岡市東区馬出5丁目31外地内において、福岡市教育委員会が平成20（2008）年7月15日から同年10月15日まで発掘調査を実施した、都市計画道路馬出東浜線建設に伴う箱崎遺跡第62次調査の報告書である。
2. 調査は、廃土処理の都合上から東西に二分割している。最初に調査した西側（調査区全体の約2/3）をI区、土砂を反転後に調査した東側（同約1/3）をII区としている。遺構の呼称は記号化し、甕棺墓（近世）をS T、土坑および土壙墓をS K、溝状遺構をS D、井戸をS E、性格不明遺構をS X、柱穴および性格不明ピットをS Pとしている。また遺構番号は、調査時に用いた番号をもとに一部整理修正して報告している。
3. 本書の遺構図に用いる方位北は、断りのない限り国土地標北である。ただし、一部の遺構図に磁北を用いた場合がある。調査区の座標は任意のものである。国土地標上における調査区の位置は、馬出東浜線道路建設に伴い、土木局道路建設部（現・道路下水道局）が道路建設予定地周囲に設置した測量基準点より国土地標を移動して求めている。なお座標系は世界測地系によるが、周囲における既存の発掘調査地点の国土地標値は日本測地系による場合が多いので注意が必要である。
4. 本書の遺構図に用いる標高は、菅崎土地区画整理事業において設置された測量基準点兼水準点の標高から移動して用いている。
5. 本書に用いる遺構図は、久住猛雄（埋蔵文化財第1課）、坂口剛毅（技能員）、山崎悠郁子（別府大学学生）、天野正太郎（九州大学学生）、角信吾（東海大学学生）、吹春憲治（発掘作業員）が実測し、作成した。
6. 本書に用いる遺物実測図の作成者は以下の通りである。土器・陶磁器・瓦類の実測は、主に上方高広（埋蔵文化財課調査員）が行い、他に西拓巳（福岡大学大学院）、山崎悠郁子（別府大学大学院）、谷澤亜里（九州大学大学院）、安武憲史（福岡大学大学院）、小嶋篤（福岡大学大学院、現・福岡県教育委員会）、久住が行った。また、金属器の実測は主に上方高広が行い、一部を西拓巳、山崎悠郁子、久住が行った。ガラス玉の実測は谷澤亜里が行った。土器・瓦等の拓本の採取は西拓巳、山崎、および成清直子（整理作業員）が行った。なお、金属器の銷取りおよび保存処理、X線写真撮影は上角智希（埋蔵文化財センター）が行い、銅錢の判読（同定）も上角が行った。金属製品については上角から教示を得た。
7. 本書に用いる遺構図および遺物実測図の製図は、成清直子、宇野美嘉（整理作業員）、上方高広、山崎悠郁子、西拓巳、谷澤亜里、および久住が行った。
8. 本書に用いる遺構写真および遺物写真は、一部を除き久住が撮影した。遺構写真のうち、空中写真撮影については、有限会社空中写真企画に業務委託し、バルーンを用いて撮影したものである。また金属器の写真については、上角智希、上方高広が撮影したものがある。また、動物遺存体の写真については屋山洋（埋蔵文化財第1課）が撮影した。
9. 本書の図表と執筆（一部を除く）は久住が行った。遺物の記述に関しては、上方高広からの教示を得た部分がある。また、動物遺存体に関する記述は屋山洋が執筆した。
10. 本調査に関わる出土遺物と記録類（図面・写真）は、全て福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

調査基本情報一覧表

遺跡名	箱崎遺跡	調査次数	62次	調査略号	HKZ-62
調査番号	0825	分布地図図題名	34. 箱崎	遺跡登録番号	0202639
事前審査番号	10-1-20	調査原因	道路建設	敷地面積	22,000m ² (全対象地)
調査期間	平成20年(2008年)7月15日～同年10月15日			工事面積	22,000m ²
調査地	福岡市東区馬出5丁目31外地内			調査面積	693.24m ² (62次調査)

目 次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2
II.調査の記録	4
1. 調査地点の位置と基本層序	4
2. 調査の経過	15
1) 調査の経過	15
2) 調査の方法と概要	16
3. 検出遺構	20
1) 近世甕棺墓	20
2) 近世土壙墓	20
3) 近世土坑（土壤幕であるか不確実なもの）	27
4) 時期不詳（中世～近世）の土坑	28
5) 中世井戸	29
6) 中世土壙墓および土坑	30
7) 溝状遺構（中世～近世）	30
8) 落込み状遺構（中世）	34
4. 出土遺物	34
1) 近世甕棺（大甕）	34
2) 土器、陶磁器、瓦	37
3) 金属製品（銅製品・銅錢、鉄製品ほか）	41
4) 有機質遺物	42
5) ガラス製品	45
6) 動物遺存体	45
III.まとめ	46

挿図目次

一挿図目次

Fig. 1 周辺主要遺跡分布図 (1/40,000)	2
Fig. 2 箱崎遺跡調査区位置図 (1/5,000)	3
Fig. 3 箱崎62次調査区の位置と周辺の調査区 (1/600)	5
Fig. 4 箱崎62次調査区全体略図 (1/250)	6
Fig. 5 箱崎62次調査区全体図 (1/100)	折込
Fig. 6 I区東半東西トレンチ土層図 (1/40)	7
Fig. 7 II区柱状土層図 (1/40)	8
Fig. 8 I区西半1面下 (2面) 検出遺構平面図 (1/100)	9
Fig. 9 I区断面図 (Fig. 5・6・8・I～VI) (1/100)	10
Fig. 10 I区西半中央2面下トレンチ実測図土層図 (1/50)	11
Fig. 11 近世甕棺墓ST019, ST845実測図 (1/30)	13
Fig. 12 近世甕棺墓ST001, ST031実測図 (1/30)	13
Fig. 13 近世土壙墓SK361, SK580実測図 (1/30)	14
Fig. 14 近世土壙墓SK363, SK362, SK702実測図 (1/30)	15
Fig. 15 近世土壙墓SK701, SK321実測図 (1/30)	15
Fig. 16 近世土壙墓SK312, SX106実測図 (1/30)	16

Fig. 17 近世土坑実測図 (1) (1/40) (SK334, SK324-325, SK441, SK536-538, SK516, SK552, SK525-539, SK462, SK464, SK188, SK187-352)	17
Fig. 18 近世土坑実測図 (2) (1/40) (SK097-102, SK099, SK103, SK202-203, ST012-SK425, SK228)	18
Fig. 19 (中世～) 近世土坑実測図 (1) (1/40) (SK730-731, SK716-718-720-721, SK625)	19
Fig. 20 (中世～) 近世土坑実測図 (2) (1/40) (SK015, SK081, SK088, SK092, SK373, SK484, SK338, SK189, SK083, SK658)	21
Fig. 21 SX601ほか (中世～近世) 上坑群実測図 (1/60) (SK733-734-740-743-748-749-781)	22
Fig. 22 井戸SE801実測図 (1/40)	23
Fig. 23 中世土壙墓SK837実測図 (1/30)	24
Fig. 24 中世土壙SK837下部遺構実測図 (1/30)	24
Fig. 25 中世土坑SK805実測図 (1/30)	25
Fig. 26 SD802, SD803, SD804土層図・断面図 (1/25)	26
Fig. 27 落込みSX830実測図 土層図 (1/50)	27
Fig. 28 ST001陶器甕棺実測図 (1/8)	29
Fig. 29 ST019陶器甕棺実測図 (1/8)	29
Fig. 30 ST845陶器甕棺実測図 (1/8)	30

Fig.31	ST031土師甕棺実測図(1/8)	30
Fig.32	近世甕棺墓出土および遺構出土中近世土器・陶磁器実測図I(1/3,一部1/4)	31
Fig.33	遺構出土中近世土器・陶磁器実測図II(1/3,一部1/2・1/4)	32
Fig.34	遺構出土中近世土器・陶磁器実測図III(1/3,一部1/2・1/4)	33
Fig.35	遺構出土中近世土器・陶磁器実測図IV(1/3,一部1/2・1/4)	35
Fig.36	遺構出土中近世土器・陶磁器実測図V(Ⅰ区東半2面II区遺構)(1/3,一部1/2・1/4)	36
Fig.37	SE801出土陶磁器実測図I(1/3)	37
Fig.38	SE801出土陶磁器実測図II(1/4), SK321出土陶磁器実測図補遺(1/3)	38
Fig.39	SD802出土土器・陶磁器実測図(1/3)	38
Fig.40	SX830出土土器・陶磁器実測図(1/3,一部1/2)	38
Fig.41	Ⅰ区1面以下トレンチ包含層グリッド出土土器・陶磁器実測図(1/3,一部1/4)	39
Fig.42	Ⅰ区Ⅱ区1面検出時および擾乱出土土器・陶磁器実測図(1/3, 1/4)	40
Fig.43	古代以前の土器実測図(1/3)	40
Fig.44	箱崎62次出土中世瓦実測図(1/4)	41
Fig.45	箱崎62次出土金属製品実測図I(1/3)	42
Fig.46	箱崎62次出土金属製品実測図II(1/3,銅鏡銅鏡は2/3)	43
Fig.47	SK702出土金属製品・土器(1/3,銅鏡折影は1/1)	43
Fig.48	箱崎62次出土中国錢貨拓影(1/1)	43
Fig.49	箱崎62次出土近世錢貨拓影(1/1)	44
Fig.50	SK702出土ガラス丸玉実測図(1/1)	45
Fig.51	SK334, SK281出土遺物(1/3)と近世土壙SK281(1/40)	46

一表目次

表1	I区東半(1面下)東西トレンチ土層図(Fig.6)注記	7
表2	Ⅱ区壁面・1面下柱状土層図(Fig.7)注記	8
表3	I区西半中央2面下トレンチ土層図(Fig.10)注記	11
表4	SD802, SD803, SD804土層図・断面図(Fig.26)注記	26
表5	落込みSX830土層図(Fig.27)注記	27
表6	箱崎62次出土金属製品一覧表(銅錢除く)	44
表7	箱崎62次出土銅錢一覧表I	44
表8	箱崎62次出土銅錢一覧表II	45
表9	箱崎62次出土動物遺存体一覧表	45
表10	箱崎62次出土動物遺存体一覧表II	46

本文中写真(Ph.)・表紙写真目次

Ph.1	バルーンによる空中写真撮影(Ⅰ区, 東から)	7
Ph.2	発掘調査作業状況(Ⅰ区西半, 南西から)	9
Ph.3	Ⅰ区調査終了状況(西から)	12
Ph.4	ST02(左)～ST05(右)近世甕棺墓検出状況(東から)	12
Ph.5	ST12(左)・ST11(右)近世甕棺墓検出状況(南東から)	12
Ph.6	SE801井戸側縦組出土状況(東から)	22
Ph.7	SD802土層断面①(西から)	25
Ph.8	SD802土層断面②(東から)	25
Ph.9	SD803土層断面(西から)	25
Ph.10	SD804土層断面(西から)	25
Ph.11	発掘調査作業状況(Ⅱ区, 東から)	28
表表紙写真	調査区空撮全景(合成写真) 裏表紙写真 (左上)Ⅱ区中世井戸SE801(北から) (右上)Ⅰ区近世土壙墓SK362(西から) (左下)Ⅰ区近世土壙墓SK580(南から) (右下)Ⅰ区近世甕棺墓ST31(南西から)	

写真図版(PL.)目次

(PL.1～4はカラー図版)		
PL.1	1. 調査区空撮全体写真(合成写真)	
PL.2	1. I区西半2面遺構調査状況 2～5. SK362・580近世土壙墓出土状況	
PL.3	1～3. SK702・363近世土壙墓出土状況 4. 落込みSX830土層断面 5. I区西半中央2面下トレンチ北壁土層断面	
PL.4	6～8. I区東半1面下トレンチ北壁土層断面 1. 2. SK363出土和鏡 3・4・6～8. 和鏡・銅鏡布目痕(織維痕) 5. SK580出土銅製臥鈴 9. SK702出土キセル・毛抜・銅鏡 10. SK181出土銅製鈴 11. 摂乱001出土敷金銅製小仏像	
PL.5	1. I区(1面)調査状況全景(空撮)	
PL.6	2・3. I区, II区調査状況遠景(空撮) 2. 1. I区(1面)調査状況(空撮)	
PL.7	3. I区(1面)中央調査状況	
PL.8	1・2. I区(1面)中央～西部調査状況	
PL.9	1. I区西半2面調査区中央～西側調査状況 2. II区調査状況全景(空撮)	
PL.10	1～4. II区調査状況, II区土層写真 5～8. ST001-031-019近世甕棺検出・出土状況	
PL.11	1. ST845近世甕棺検出状況 2～4. SK361・321・701近世土壙墓出土状況 5・6. II区中世遺構(SK837, SE801)調査状況 7. 落込みSX830空撮状況	
PL.12	1～10. 箱崎62次出土遺物写真	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成10年6月24日、福岡市土木局東部建設第1課より都市計画事業に基づく「馬出東浜線」道路整備事業の計画に伴い、福岡市東区馬出・箱崎地内における「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」（事前審査番号10-1-20）の文書が提出され、埋蔵文化財課ではこれを受理し対応を協議した。対象地の多くの部分は箱崎遺跡として周知されている埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、書類審査、確認調査（試掘調査）を実施して対象地における遺跡の範囲と各地点の埋蔵文化財の有無を確認するとともに、関係部局と協議に入った。確認調査の結果から、事業予定地のうち箱崎遺跡に含まれる範囲の大部分に井戸、土坑、ピットなどの遺構や中世の輸入陶磁器などの遺物があり埋蔵文化財の存在が認められたので、文化財保護法に基づき、記録保存のための発掘調査を実施することになった。統いて用地買収や既存建物の撤去などの諸条件が整った箇所から、順次発掘調査を行った。当該事業による発掘調査は、平成13年度の27次調査（福岡市埋蔵文化財調査報告書第812集）から開始され、37次（14年度、951集）、45次（15年度、951集）、47次（16～17年度、1046集）、54次（18年度、998集）、55次（19年度、1046集）が順次行われ、これらはすでに報告書も刊行されている。

本報告の62次調査部分は、事業対象地のうち最後に残っていた部分である。62次地点は、調査前は隣接する妙徳寺が管理する墓地区画の一部となっており、墓地移転の問題から用地買収と工事着工が保留されていた。しかし平成19年度に入り、当初の墓地区画のうち道路用地となった南半部分を解体・改葬し、墓地区画の北半の土地に墓地を新たに造成してここに墓を移転することになり（墓地造成部分は事前審査番号19-2-563）、用地買収と工事着工の日程が立つことになった。これを受け、墓地であった道路用地と新たに墓地が造成される北側隣接地について、平成19年10月29日と12月6日に確認調査を行い、道路予定地と墓地造成予定地の双方について遺構や遺物包含層などの埋蔵文化財が確認された。この結果を受け関係者の間で協議を行ったが、墓地造成部分に関しては造成時の掘削深度から埋蔵文化財に影響が避けられず発掘調査が必要なこと、墓地造成工事のための搬入路や資材置場の確保の必要性があること、また墓地移転工事を早急に終えたいという寺と檀家の希望もあり、墓地造成部分（民有地）の発掘調査を優先して行うということで関係者間の合意を得た。このため、北側隣地の墓地造成部分についての発掘調査が箱崎遺跡60次調査として平成19年度末（平成20年1月21日～3月27日）に先行して行われるに至った（「福岡市埋蔵文化財年報Vol.22」「0762 箱崎遺跡60次調査」）。60次調査終了後の平成20年度に入り、北側隣地の墓地移転工事が進み工事搬入路や資材置場の問題がなくなる時期を見込んで62次調査部分の本調査の予定が立てられ、平成20年7月に62次調査が開始されることになった。

発掘調査は、平成20年7月15日に開始され、途中8～9月のたび重なる豪雨の影響があり若干の期間延長などの工程調整を行ったが、平成20年10月15日に調査を終了した。なお整理作業と報告書作成は平成21年度に行っている。

2. 調査の組織（平成20年度：本調査年度、平成21年度：整理・報告年度）

調査委託 道路下水道局東部建設課（平成19年度まで土木局東部建設課）

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 山田裕嗣

調査総括 文化財部埋蔵文化財課 課長 川口譲治（平成20年度）、濱石哲也（平成21年度）

埋蔵文化財第1課調査係長 米倉秀紀

事前審査 埋蔵文化財第1課事前審査係 星野恵美（20年度）、阿部泰之（21年度）

調査担当 埋蔵文化財第1課調査係 久住猛雄

庶務担当 文化財管理課 古賀とも子（平成20年度）、山本朋子（平成21年度）

なお本調査にあたっては、猛暑の中、多くの発掘作業員の方々の協力を得た。現場における遺構実測は、坂口剛毅（技能員）、山崎悠都子（別府大学学生）、角信喜（東海大学学生）、吹春憲治（発掘作業員）、久住が行った。また発掘調査には作業員として九州大学学生の片岡ゆう、中井歩が参加した。整理作業は、担当者の指示の下、成清直子、宇野美嘉、丸茂朋が行った。遺物の実測は、主に上方高広（調査員）が行い、他に西折巳（福岡大学大学院）、山崎悠都子（別府大学大学院）、谷澤亜里（九州大学大学院）、安武憲史（福岡大学大学院）、久住が行った。本調査の条件整備においては、道路下水道局東部建設課のご協力を得た。また、発掘調査中に出土した近世以降の墳墓における人骨については、調査地が元々隣接する妙徳寺（妙徳禪寺）が管理する墓地であったことから、協議の上、妙徳寺が引き取り、荼毘・供養して頂けることになった（隣接し先行して行われた60次調査における合意を継承している）。これら関係各位の方々に対し、特に記して感謝申し上げたい。

3. 遺跡の立地と歴史的環境

箱崎遺跡は日々良川河口の博多湾岸に形成された南北に延びる古砂丘上に立地する。この砂丘は箱崎砂層と呼ばれ、本遺跡付近から室見川河口付近までの博多湾岸に分布しており、本遺跡を含め、多くの遺跡が立地している。箱崎遺跡の埋蔵文化財包蔵地は、およそ南北1000m以上、東西500mの範囲に広がり、その標高は2.0～3.5m前後である。

箱崎遺跡は1983年の地下鉄貝塚線建設に伴う第1次調査以来、現在（2009年12月）までに65次の調査を数えるが⁴、調査の本格化は1990年代からである。弥生時代以降、近世までの遺構と遺物が検出されているが⁵、中世の遺構と遺物の調査・報告が多い。これは、古代巾頃である10世紀前半の923年（延長元年）に宮崎宮が創建されたのを機として、門前町として周囲に集落が広がり、12世紀以降には広範囲に広がり「中世都市」として変貌を遂げたためである。宮崎宮創建の10世紀から11世紀頃までの遺構は、遺跡の東半分に主に分布する。これは箱崎遺跡の砂丘の東側には、かつては中世のある時期までは入江（潟湖）が存在し、



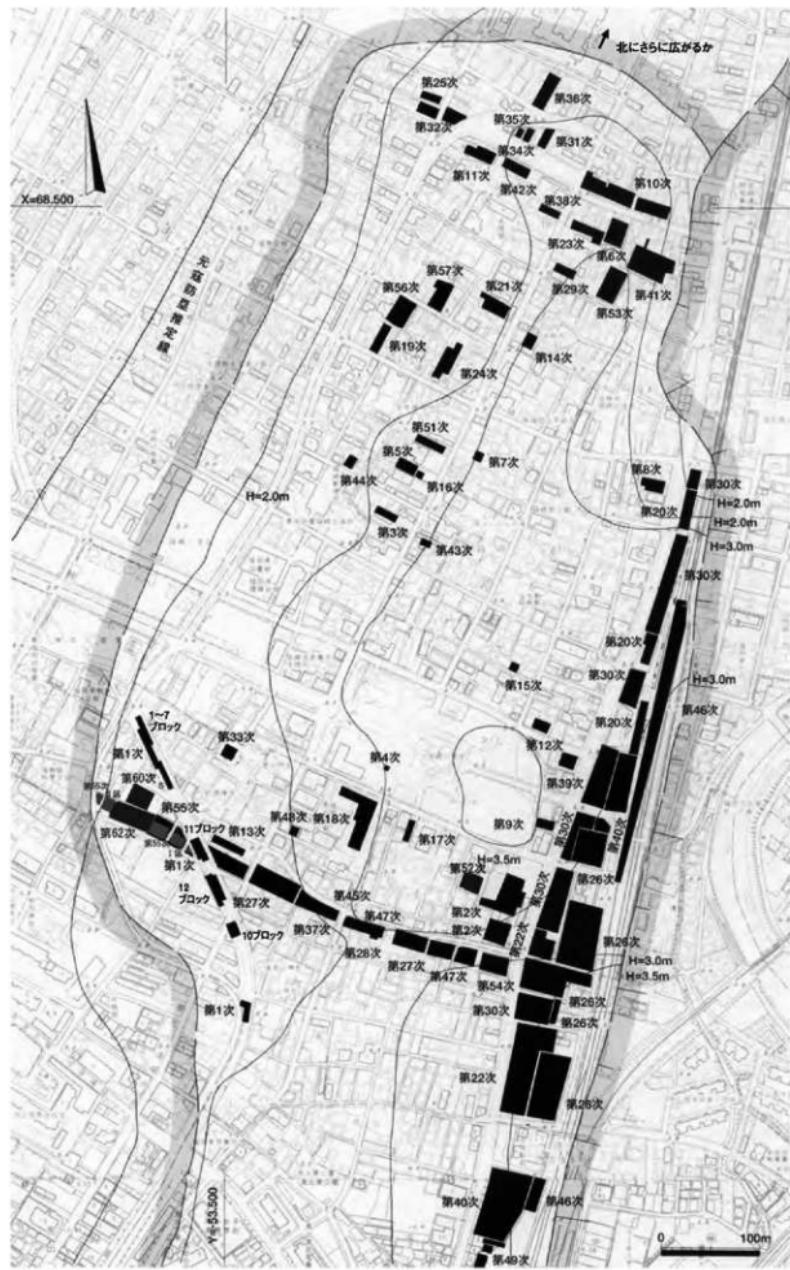


Fig.2 箱崎遺跡調査区位置図 (1/5,000)

*52次調査の位置は、報告書(第997集, Fig1)に誤りがあったため訂正している。

「箱崎津」という港津として機能していたようである。現在でもこの潟湖推定地は標高の低い土地が広がっている。筥崎宮は石清水八幡宮の別宮となったり（1051年、1185年）、大宰府所領となったり（1140年）、歴史上、權門社寺との結びつきが強くみられる。遺跡の分布は12世紀頃に南北に走る砂丘尾根線前後に広がり、13世紀にかけて遺構分布は全域に拡大するこれはその潟湖の埋没過程とも関係があるだろう。現在の筥崎宮の門（鳥居）は西側に向かっているが、何時からそうなったかというのも箱崎遺跡の歴史の上では問題であろう。なお12世紀半ばには、博多と箱崎に1600軒以上の家屋があったという記録もあり、その頃までは博多と並んで「都市化」が達成されていることが遺構や遺物の増大からも確実である。同じ頃（1151年）には、大宰府の檢非使による「宋人大追捕」が博多から箱崎にも及んでおり、やはり博多と同様に宋人の居住が考えられ、博多に次ぐ貿易都市としての性格も考えられ、貿易陶磁の量の増大が11世紀から12世紀に顕著である。『今昔物語』には筥崎宮の神官自らが、宋人と貿易交渉をしていたことが記されている。13世紀後半には、遺跡西側の海岸線最前列の砂丘に元寇防塁が築かれたはずであるが、後世の削平が激しく、現在はその痕跡をほとんど留めない。元寇のうち文永の役（1274年）には筥崎宮が一時焼失したとされ、13世紀後半の焼土層が検出される調査地点も多く、箱崎一帯が戦火に見舞われた可能性が高い。しかしながら、1323年（至治3年）に沈没した韓国新安沖沈没船からの「筥崎宮」銘木簡の出土から14世紀前半までは貿易拠点の一つとして存続していたようである。その後の中世後半以降の遺構については、近世遺構と混在する浅い深度に多く存在するためか、調査例が少なく不明な点が多い。しかし、「海東諸國記」や「宗湛日記」などの14～16世紀の国内外の文献に「筥崎（箱崎）」の地名が散見され、また中世に創建されたとされる寺社も多く、箱崎の集落（街）は近世を経て近現代へ継続しているものとみられる。なお近年の調査からは、Fig.2に示す遺跡の北端部分での中世遺構が濃密であることから、遺跡の範囲がさらに北側の九州大学構内に大きく広がる可能性が指摘されている。

中世以前の遺跡の様相についても触れておく。弥生時代から古墳時代については、「箱崎33」（52次報告、福岡市埋蔵文化財調査報告書第997集）に詳しいが、弥生時代の遺構や遺物は散発的で（6次・22次に早期～前期の石器・土器、18次に中期の土器、30次16B区に後期初頭の壺棺墓、22次・30次13区で後期の土器）、安定的に遺構が見られるようになるのは古墳時代初頭以降である。古墳時代前期～中期の遺構や遺物は、8・10・20・22・26・30・40・46・47・52次で検出されている。碧玉を素材とする玉作（47次・52次、「箱崎36」第1046集）、韓半島の還元炎焼成（陶質・瓦質）土器や軟質土器、東海系のS字状口縁甕などの遺隔地からもたらされた土器の出土が少なくないこと、飯蛸壺の集中出土（8次）、葺石を有する中期の円墳（40次）の検出など興味深い発見も多い。古墳時代後期にも遺構・遺物は継続するが（20・30・40次）、遺構数は減少する傾向にある。古墳時代の遺構の大部分は、砂丘列中央の南北方向尾根の東側、古代までは存在した潟湖に向かって傾斜する緩斜面上に分布する。その後の7～9世紀の遺構は不明瞭で、遺物が散漫に出土するにすぎない。これは博多や堅粕、吉塚などの周囲の砂丘上に存在する遺跡（Fig.1）の消長傾向と異なっている。

II. 調査の記録

1. 調査地点の位置と基本層序（Fig.3・4）

本報告の第62次調査地点は、箱崎遺跡の南西縁辺部にあたり、現在の標高は3.2～3.6mを測る。東側が微妙に高い地形となっている。周囲には、北側に60次調査、東側に55次調査Ⅰ区、西側に55次調査Ⅱ区の各調査地点があるほか、東側に1次調査地点が位置している（Fig.2・3）。

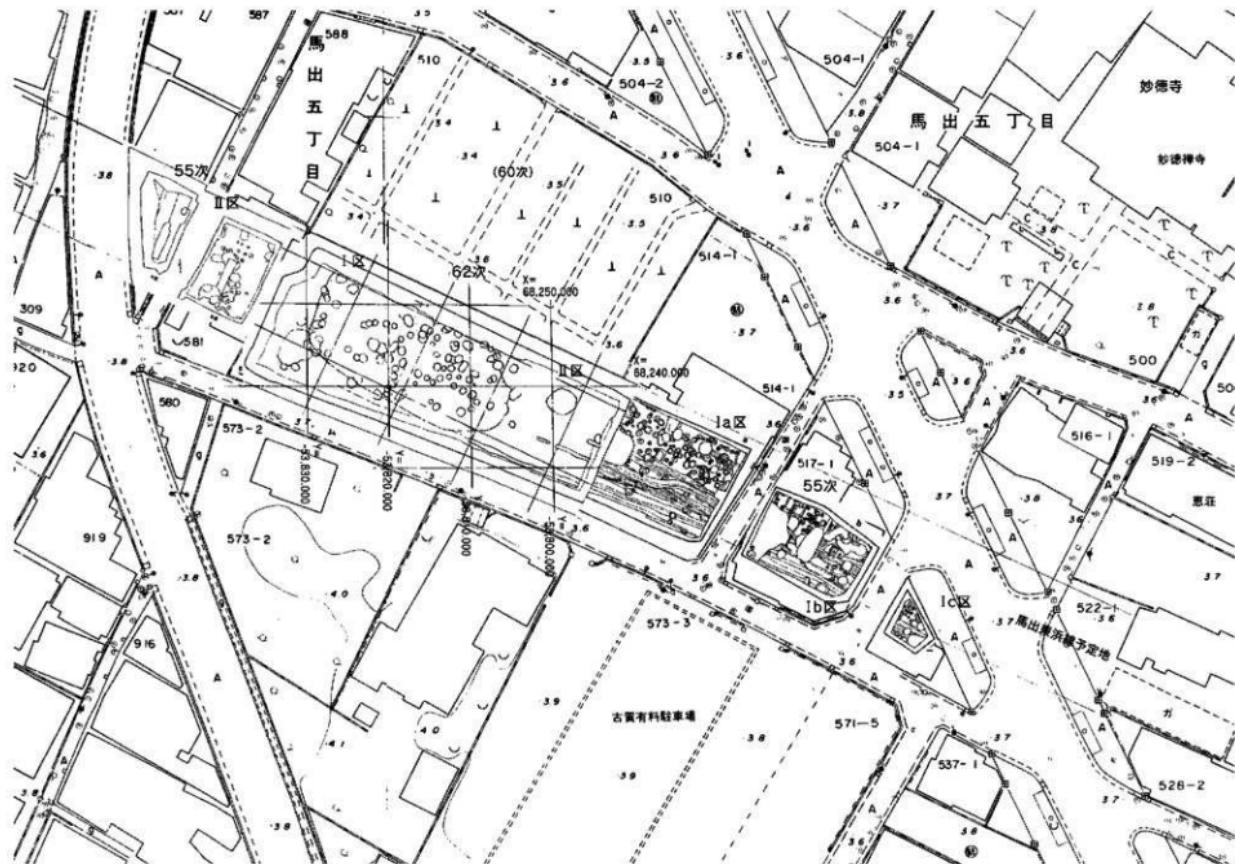


Fig.3 箱崎62次調査区の位置と周辺の調査区 (1/600)

地下鉄2号線建設前に行われた1次調査では（Fig.2参照、福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集、以下「○○集」とする）、現在の箱崎地区の大学通りを中心とする街割（13世紀形成の街区に起源か）に近い方向の大溝・溝状遺構や、これに伴う道路遺構が検出されている（北西側1～7ブロック）。道路遺構とされた整地層は13世紀後半～14世紀前半という。その他の廃棄土坑や井戸も13～14世紀が多く、一部12世紀後半がある。55次I区の東側になる1次11ブロックは、大半が近世墓の群集であり、これは60・62次と同様に、隣接する妙徳寺の近現代までの墓域の一つであったものである。この南の12ブロックでは、南部柱穴群が密集し、その北側に13～16世紀の井戸が累代的に存在する。その他、14～16世紀の石組（配石）遺構がある。

62次の東に隣接する55次（1046集）のI区（1区）では（Fig.3）、大学通りに直交する方向の溝群や12～13世紀を主体となす土坑や遺物が検出されている。55次報告では溝群について、「中世末～近世段階」の遺物が多いとして、その時期の可能性を考えているが、一方では下層で中世段階の遺物が多いとして中世前半の掘削の可能性も述べている。これらの一帯の溝は62次II区に続き、それを勘案するとおそらく後者が妥当である。例えば55次Ia区の溝群の前後関係はSD003→SD125→SD002だが（報告第5図）、図示されたSD003の遺物は12世紀中～後葉、SD002は13世紀前～中葉であり（同第7・8図）、時期的矛盾はない。上層部が掘り返されているとするが、報告の土層図では近世の掘り返しの想定と溝同士の重複の時期的相互関係が説明しがたい（※報告第6図上層図と第5図の溝番号に異動があり注意）。報告の土層写真を見ると、遺構検出面より上のレベルにいくつもの新しい掘り込みがあるようにも見られるのでおそらくは「中世末～近世段階」

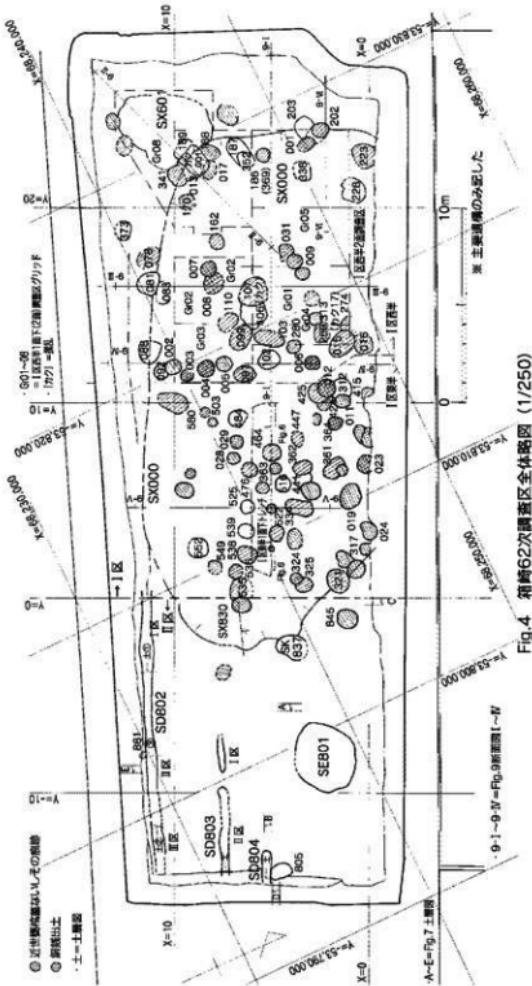
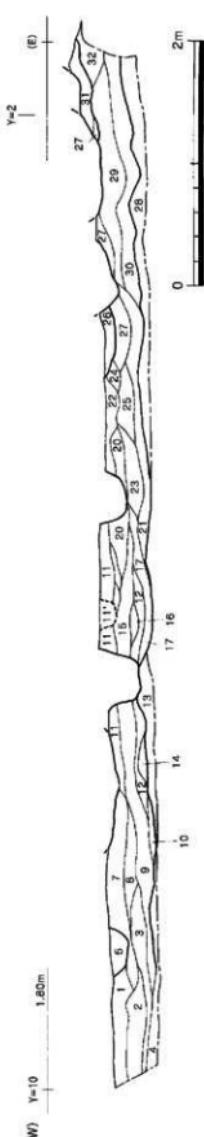


Fig.4 箱崎62次調査区全体図 (1/250)



- 1 植物根鉢付・鰐化鉄沈跡、下部に薄鉢を含む
- 2 黒より明るい褐色の(紅褐色の)砂、1層より多い砂
- 3 黑より明るく(白っぽい)褐色(黄褐色)、2層より多い砂、2~3mmの砂を含む
- 4 黑褐色地、3層より多い砂、しまりよりも多い、盃状を作む
- 5 厚さ約0.5m、褐色地、無機マングン沈跡、しまりよりも多い、盃状を作む
- 6 厚さより薄い褐色地、5層より細かい砂、鰐化鉄沈跡、5層よりしまりが多い、盃状を作む
- 7 黑褐色地、5層より細かい砂、鰐化鉄沈跡、5層よりやや少しあがり、盃状を作む、盃状を作む
- 8 黑より明るい褐色地、5層と同じ細かい砂、盃状を作む、7層と同じ細かい砂、盃状を作む
- 9 3層と同様に土色・土白、灰白色、盃状を作む
- 10 4層と5層と同様の褐色地(紅褐色地)、細かい砂(7層とはほぼ同じ)、2~3mmの砂を含む、4層よりしまりが多い
- 11 7層より明るい褐色地、7層と同じ細かい砂、7層よりしまりやや多い、盃状を作む
- 12 8層より明るい褐色地、7層と同じ細かい砂、8層より細かい砂、9層よりしまりが多い、9層と10層との間に盃状を作む
- 13 11層と12層と同様の褐色地
- 14 3層を含むたる砂層(10層より多い)、9層より細かい砂、9~10層よりも多い、盃状を作む
- 15 14層より赤褐色ない(灰褐色)、9層より多い、5~6層の砂層を含む
- 16 11層よりしまり多い、盃状を作む
- 17 16層と同様に土色・土白、無機マングン沈跡、12層よりややしまりが多い

表1 Ⅰ区東半(1面下)東西トレント土層図 (Fig.6) 注記

の遺物は、溝上面で検出できなかったその段階の諸遺構（溝の掘り返しとは限らない）の混入である蓋然性が高いと考えておきたい。ただし、SD002は62次SD803（近世遺物あり）に続くもので、SD125の凹みに再掘削された近世溝である可能性がある（1a区中央以西のSD002下部はSD125である可能性があり、中世遺物はSD125に伴うか）。次に55次II区（2区）は、西側A区で街衝に沿うような略南北の大溝SD001があり、中世末（16世紀後半）の掘削で、近世までの箱崎の街区外縁線の可能性が考えられる。II区では中世の遺構・遺物は少なく、近世の遺構が散漫に分布する状況であった。未報告であるが、62次の北側に接する60次は（『福岡市埋蔵文化財年報』VOL.22, p.99）、62次と同じ墓域である妙徳寺が管理した近現代に続く近世墓群の密集が検出されており、槨棺（陶器棺）と土壙墓（桶棺）がある。

上師器小皿や六道鏡、和鉄・毛抜を副葬する土壙墓（桶棺）が多くあるのも62次と同じである。近世墓地は18世紀後半～幕末とするが、墓地の初現期は検討を要する。包含層から中世遺物も多く出土したとされているが、無数の近世遺構が大部分を占めるためか明確な中世遺構は幅3.0~3.5mの南北方向の大溝のみとされる。この大溝は62次では検出されておらず、60・62次の調査区間の未調査部分の側内で途切れるか、あるいは後述する落込み遺構SX000に



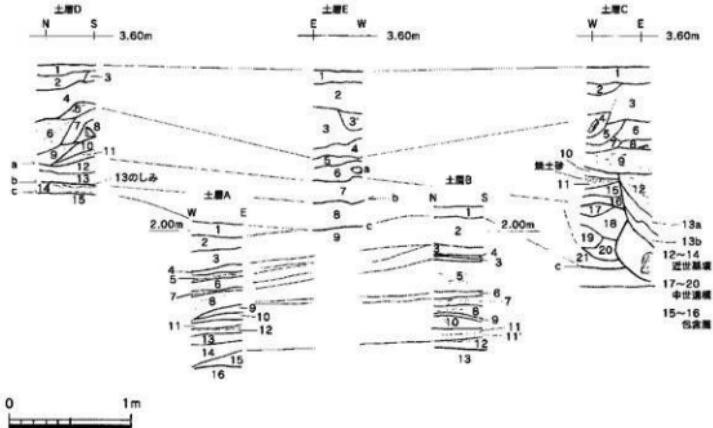


Fig.7 II区柱状土層図 (1/40)

II区表面土層図 D

- 1 黄褐色～薄黄色(中細砂)、よりやかみ
暗緑色(カスケード)
 - 2 レモン色～薄黄色(中細砂)、黄褐色
暗緑色、しまりやか(中細砂)やかみ
 - 3 2層～4層混合
 - 4 しまりやか(中細砂)、めらか(中細砂)や
シルト、薄緑色～レモン色やかみ、レンガ
色のガサ少、近現代風(1～4層)
 - 5 に(中)薄黄色～に(薄)黄褐色(中細砂)に(薄)
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、さとりやか
せいで
 - 6 褐灰色砂利風(近現代風),に(薄)
黄褐色(中細砂)や(中)、(中)薄黄色、(中)薄
褐色(中細砂)、(中)薄褐色(中細砂)や(中)薄
褐色(中細砂)とある
 - 7 (近現代風)薄黄色～白褐色(ブロック
状)やかみと(中)薄褐色(中細砂)
 - 8 に(中)薄黄色～に(薄)黄褐色(中細砂)に(薄)
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、さとりやか、
しまりやか(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 9 少し多く(に)薄黄色(中細砂)に(薄)
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、(中)薄褐色
砂(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 10 に(中)薄黄色～に(薄)黄褐色(中細砂)とある
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、(中)薄褐色
砂(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 11 (近現代風)薄黄色～白褐色(ブロック
状)やかみと(中)薄褐色(中細砂)
 - 12 明黄色～淡黄色(中)薄褐色(中細砂)とある
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、(中)薄褐色
砂(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 13 (近現代風)薄黄色～白褐色(中細砂)とある
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、(中)薄褐色
砂(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 14 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、(中)薄褐色
砂(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 15 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、(中)薄褐色
砂(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 16 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、(中)薄褐色
砂(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 17 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、(中)薄褐色
砂(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 18 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、(中)薄褐色
砂(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 19 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、(中)薄褐色
砂(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 20 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、(中)薄褐色
砂(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 21 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
褐色砂れど(0%埋め土ナラ風)、(中)薄褐色
砂(中)薄褐色(中細砂)とある
- II区表面土層図 E
- 1 高麗色～中高麗色(中細砂)、(中)薄褐色
砂(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 2 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 3 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 4 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 5 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 6 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 7 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 8 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 9 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 10 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 11 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 12 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 13 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 14 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 15 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 16 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 17 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 18 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 19 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 20 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
 - 21 中高麗色～中高麗色(中細砂)とある
- II区調査区面 十層 C
- 1 土上、(近現代風)、ガラ・バッハ・レンガ
ブロック状(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 2 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 3 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 4 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 5 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 6 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 7 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 8 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 9 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 10 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 11 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 12 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 13 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 14 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 15 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 16 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 17 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 18 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
- II区調査区面 十層 B
- 1 土上、(近現代風)、ガラ・バッハ・レンガ
ブロック状(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 2 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 3 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 4 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 5 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 6 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 7 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 8 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 9 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 10 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 11 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 12 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 13 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 14 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 15 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 16 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 17 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 18 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
- II区調査区面 十層 A
- 1 土上、(近現代風)、ガラ・バッハ・レンガ
ブロック状(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 2 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 3 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 4 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 5 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 6 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 7 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 8 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 9 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 10 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 11 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 12 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 13 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 14 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 15 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 16 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 17 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 18 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 19 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 20 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある
 - 21 淡褐色～白色(中)薄褐色(中細砂)とある

表2 II区壁面・1面下柱状土層図 (Fig.7) 注記

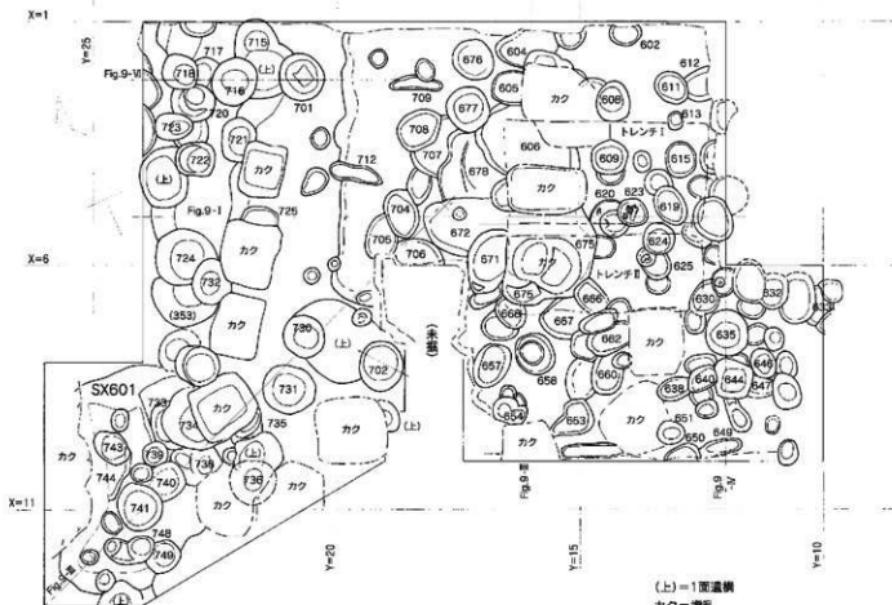


Fig.8 I区西半1面下(2面)棟出遺構平面図(1/100)

連するものかもしれない。いずれにしても、詳細な報告が期待される。

60・62次および1次11ブロックにあった近世墓地は、近現代まで続いた墓地であり、隣接する妙徳寺を菩提寺とし、同寺が管理していた墓地であるので同寺について触れておく。妙徳寺（妙徳禪寺）は、禪師栄西（臨済宗開祖）が宋より帰国（1191年）した後にまず住んだ寺という伝えがあり（『筑前国統風土記』）、12世紀末までに建立されていたらしい。開祖は葉上といふ僧とされるが、建立の詳細は不明で



ある。一時期寺が中絶したらしいが、応永年間（1394～1412年）に天性といふ僧が中興したとされ（この頃曹洞宗となる）、筥崎宮との関係も強く、近世には「今山」という山号を称し、博多にあった妙光寺（明光寺）の末寺だったという（『筑前国統風土記附録』、『筑前国統風土記拾遺』）。このように、由緒ある寺院として妙徳寺が中近世にわたって箱崎南西部に存在しており、周囲の遺跡の様相との対照が今後の課題となろう（妙徳寺の歴史については、今川正昭1992「福岡寺院探訪」海島社、などを参照した）。

本報告の62次調査区は、西側の調査区全体の約2/3をI区とし（最初に調査）、残り東側約1/3をII区として調査した（Fig.4, 折込Fig.5）。遺構検出面は、これをどう設定するかについて調査時にまず苦慮しており、その設定事情（層位）と落込み遺構SX000の存在について、以下詳しく触れておきたい。

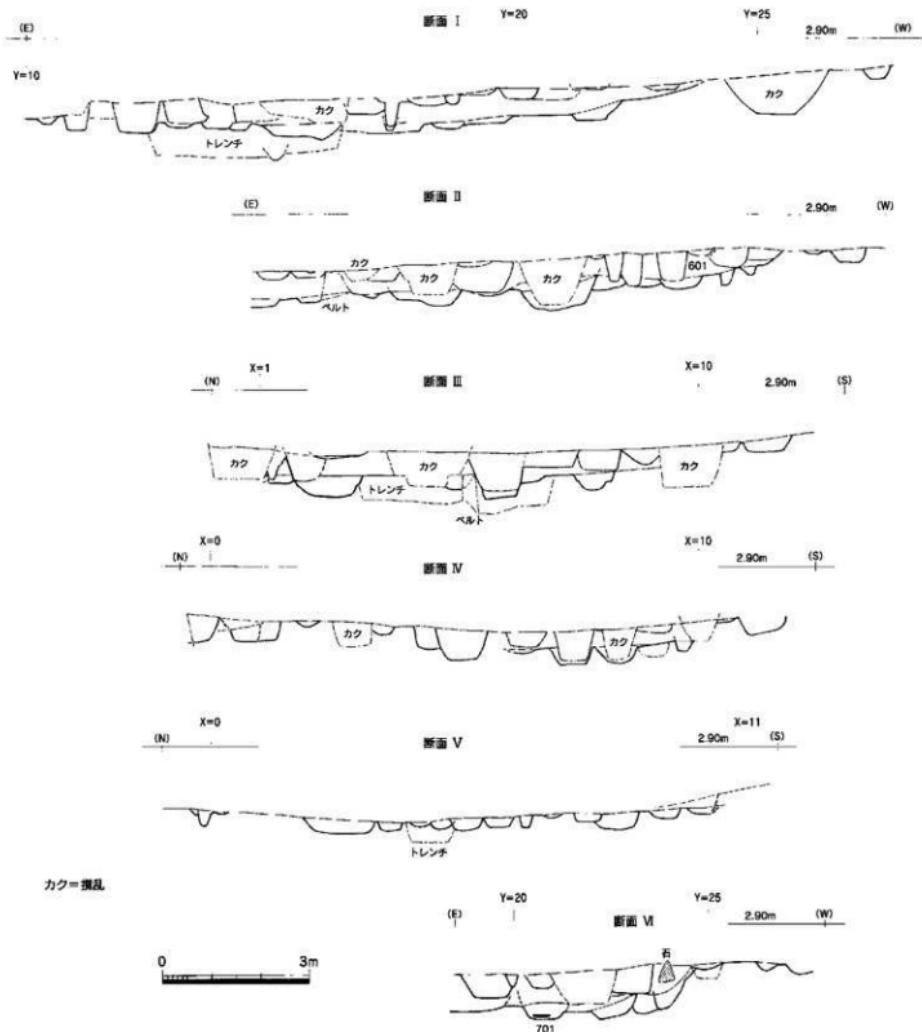


Fig.9 I 区断面図(Fig.5・6・8-I ~ VI) (1/100)

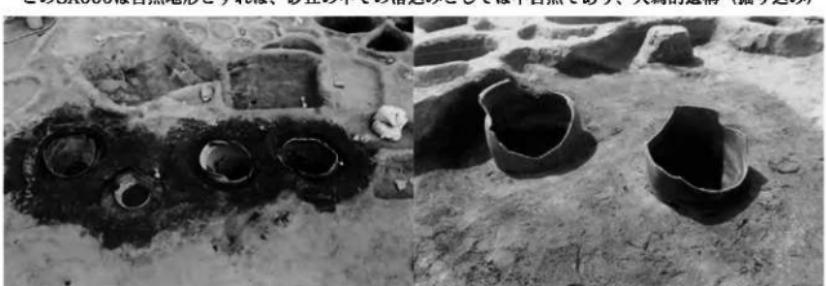


Ph.3 I区調査終了状況（西から）

I区の表土掘削は西側から東側に向かって行った。最も西側では、近現代の盛土層、近世の包含層を除去したGL-90cm前後の標高2.2~2.4mで砂丘砂となり遺構検出面としたが、調査区西端から4~5m以東では同じ高さでは砂丘砂上面とはならず、中世遺物を包含しつつ近世（～近代？）の壇棺をはじめ無数の土坑が検出できる包含層（暗灰褐色砂質土～暗黄灰色砂）が検出された。この層の下に砂丘面が落ちるものと考えられたが、その上の当該包含層は中世遺物も多量に含まれ、この時点では中世の遺構面でもある可能性も考えられたため、この上面を少し下げたレベルを遺構検出面（I区西半1面）とした（Fig.9参照）。このレベルを検出面としたのは、調査区の任意座標上のy=12前後以西であるが、検出面の標高は西側（y=24前後）では2.0m前後、東側では1.6m前後である。なお調査区南辺は比較的高く砂丘面を遺構面とし、y=12以西では1.9~2.1mで砂丘面となり、南から北へも砂丘が落ち込んでいる。また調査区北側壁際は1.7~1.8mであり、調査区中央が最も低く、この包含層上面（1面）は北側にも立ち上ることが分かった。次にy=12前後より東側（I区東半）の表土掘削時には、I区西半の遺構検出と擾乱掘削作業を始めており、I区西半で表土剥ぎを止めた包含層上面層では近代以降の掘り込みが多く残ること、中世遺物も僅かに含む可能性があるが、検出遺構の大半は近世遺構（および近代以降の擾乱）であると判断されたことから、調査期間などを考慮して、I区東半ではやむを得ず重機掘削の深度をさらに下げて砂丘上面を遺構検出面とした（Fig.9参照）。したがって、「I区東半1面」はI区西半1面の大部分とは層位が異なり、「I区西半中央」に設定した「2面」（後述）とほぼ同一層位となっている。I区東半の検出面（砂丘上面）標高は、中央部で1.1~1.2m前後、I区東端では標高1.7m、北辺では1.6~1.8m（I区北端は2.0m）、南辺はやはり高くなり1.7~1.9mとなる。

このように、I区の大半は東側（II区SX830が東端となる）、南辺、西側の砂丘上面が高く、これらに囲まれた中央が大きな落込み状（SX000とする）になっていることが判明した（Fig.4）。さらにI区東半北辺でも砂丘層上面が立ち上がり始めるので、この落込みは東西27m、南北14mないしそれ以上の範囲となる（北側は、隣接する60次まで延びるものか不明だが、62次北辺よりも少し延びるものと予想する）。

このSX000は自然地形とすれば、砂丘の中での落込みとしては不自然であり、人為的遺構（掘り込み）



Ph.4 ST02 (左) ~ST05 (右) 近世壇棺墓検出状況 (東から) Ph.5 ST12 (左) · ST11 (右) 近世壇棺墓検出状況 (南東から)

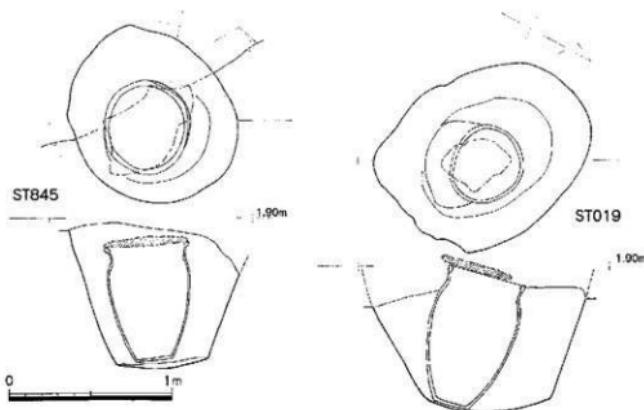


Fig.11 近世墳墓ST019,ST845実測図（1/30）

の可能性が高いと考えられる。掘り込み上面の層位が不明確である難点があるが、この遺構の東端と考えられ、埋没後の近世遺構の掘り込みが少なくプライマリーな部分が多いSX830（後述）の出土遺物を参考にすると（Fig.40）、12世紀後半前後以降に形成された可能性がある（Fig.40-5の土師器環は13世紀末～14世紀初めの可能性があり、埋没開始の下限を示す）。SX830をその一部とするSX000を大きな掘り込み遺構と考えた場合、周囲が砂地であり遺構縁辺の埋没は早いであろうから、SX830出土遺物は埋没初期の時期を示す可能性がある。後述のようにI区下部トレーン（東半1面下、西半2面下）中に13世紀前半の遺物が僅かに含まれ、その上部（I区革盤の河川堆積層上部）に風成砂が堆積して砂丘が成長する一定期間があり、その後の13世紀後半～末に掘り込まれて形成されたと見ておきたい。掘り込みとした場合はその性格は不詳であるが（ちょうど中世都市箱崎が大きくなる時期であるので、一案として他の地点の堀め立て・墓地のための土砂取り場であったという可能性もある）、その後の埋没過程で中世遺物を含む堆積（包含層形成）があり、埋没過程で少數の中世遺構も形成され、埋没がかなり進行した近世前期以降にいたって近世墓地が展開したものと考えられる。近世墓の分布はこのSX000によおよそ一致しており（SX000外にも近世墓は展開するが、分布数が激減する）、後代の土地区画に影響を与えるような地形の凹みであったのであろう。SX000を人為的遺構の可能性が高いとしたが、あるいは砂丘の縁辺が自然の作用で浸食された可能性も想定しておくべきかもしれない。

その場合、ちょうど地下

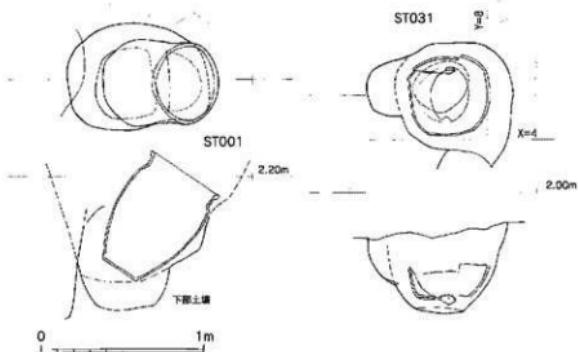


Fig.12 近世墳墓ST001,ST031実測図（1/30）

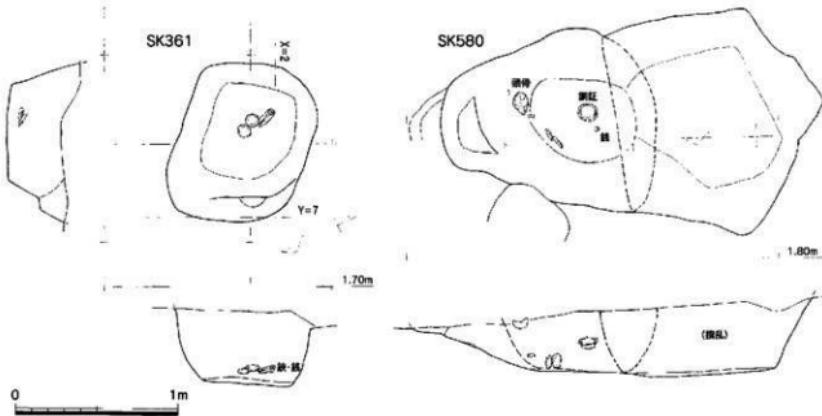


Fig.13 近世土壙墓SK361,SK580実測図 (1/30)

鉄建設（1次調査）ライン（このライン自体は建設時の任意のものである）の西側に沿うような形で一定幅が北西側から浸食されたことになろう。しかしその場合の自然的要因が不明であり、その可能性は低いと考えておく（地質学的な地層観察をしていないのでこの判断は不安もある）。またSX000については、隣接する60次に続いているものかどうかも問題があり、その様相によってもその性格が判断されよう。

次にⅠ区西半であるが、上記のSX000の範囲内で、大半が近世遺構であった範囲について、グリッドを設定してⅠ区東半調査面と同じレベルまでさらに下げるのが「Ⅰ区西半（中央）2面」である（Fig.8、「1面」とのレベル関係はFig.9参照）。この面でも近世遺構が多かったが、中世遺構も検出している（中世遺物も多くなっている）。この範囲（面）での地山砂は、Ⅰ区西側・南辺・東辺で認められる風成砂丘というよりは、一部レキを含んだり、粗砂を含んだりする複雑な堆積で、基盤は河川堆積と考えられる（Fig.10）。Ⅰ区東半の1面下ではレキはほとんど含まないが、一部に粗砂層がみられ、やはり基盤は河川堆積であろう（Fig.6）。Ⅰ区西半2面検出中に、「地山」砂中から一部に遺物の出土が認められたので、中央に広めにトレンチを設定し、土層を観察した（Fig.10）。自然の凹み（古河川の埋没過程か）の上に小溝が検出されたが⁴（SD901）、人為的な溝であるかは不明である。遺物もあまり認められず、この面（トレンチ下部）での調査面設定は行っていない。なお自然埋没過程の混入と思われるが、「2面」下部の砂層中に、主に12世紀後半までの遺物があり（Fig.41-2～7）、一部に13世紀前半がある（Fig.41-1）。同様にⅠ区東半1面下トレンチ中でも13世紀代の可能性がある遺物が僅かに含まれ（Fig.41-30）、遺構出土の混入可能性を完全には排除できないが、現状では13世紀前半までにⅠ区部分の基盤層が形成されたとみておきたい。

次に反転後のⅡ区（調査区東半）であるが、近現代盛土層、近世包含層を除去した砂丘上面を遺構検出面とした（Fig.7）。SX000の東端であるSX830の外縁線内外に近世墓が若干分布する他は、Ⅰ区と異なり近世墓をはじめとする近世遺構の分布は少なく、明らかに近代以降と考えられる攪乱が多い他は、遺構の比較的多くは中世であった（主に中世前期）。Ⅰ区／Ⅱ区の境界は、調査時の偶然であるが近世墓地の分布に明確な差があり、明瞭なコントラストをなす（折込Fig.5, PL.1）。また、検出した中世遺構の密度も東側隣接地の55次Ⅰ区に比較して薄く、これは後世の土地区画ごとの土地利用による削平度合の差異によるものであろう（Fig.3）。Ⅱ区の検出面レベルは（砂地が軟らかく、実際の砂丘上面より耕作作業時にレベルがかなり下が

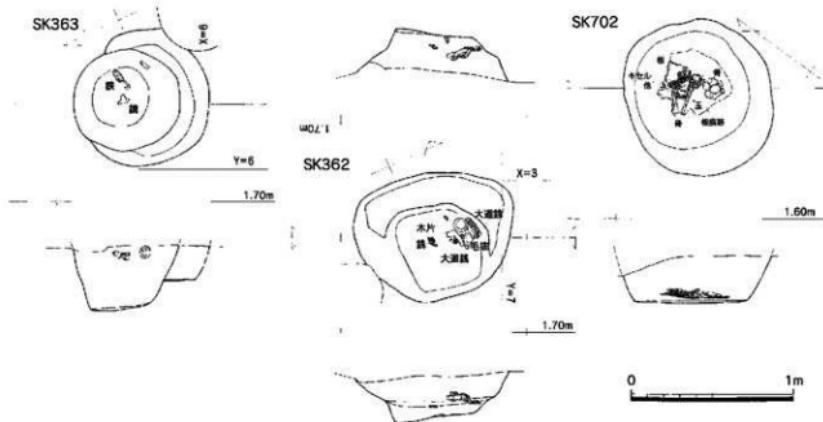


Fig.14 近世土壙墓SK363,SK362,SK702実測図 (1/30)

てしまっているが、そのレベル)、西辺で1.8~2.0m、東辺で2.1~2.4mである。東側の砂丘上面レベルがやや高い、もしくは削平度合がやや少ない状況と考えられる。

2. 調査の経過と概要

1) 調査の経過

発掘調査の開始は、年度当初は2008年6月中を予定していたが、墓地移転工事(前年度末に行われた60次調査区の敷地に墓地を改葬・移転)の工程の都合により、再協議の結果7月中より行うことになった。

調査は、2008年7月15日よりI区(対象地西半)の重機による表土掘削から行った(~7月18日)。改葬された近現代の墓がある表土層より深く存在する陶棺(櫛棺)を含む近世墓が多く検出された。無数の遺

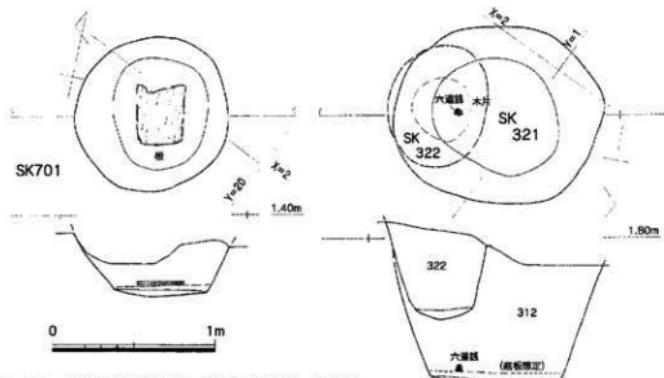


Fig.15 近世土壙墓SK701,SK321実測図 (1/30)

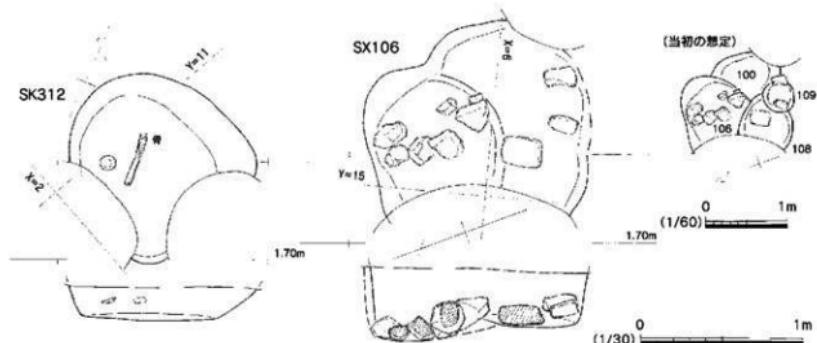


Fig.16 近世土壤墓SK312,SX106実測図(1/30)

構があり、遺構検出や遺構掘削にかなりの手間ひまをかけることになった。8月に入り、台風の接近や、特に「ゲリラ豪雨」が度々あった。遺構面が砂地で脆く、そのたびに雨で調査区の壁や遺構が崩れ土砂が流失して掘削部分に溜まってしまうことがあり、遺構の再掘削を含む復旧作業や土砂流失や崩落の防止作業に時間を割くことが多くなった。これにより全体の調査工程に大幅な遅れが生じてきたため、当初計画の9月末での調査終了が困難な情勢となった。これを承け関係部局と協議し、10月中旬まで調査期間を確保することで合意を得た。9月初めまでに大半の遺構を掘削し、9月9日にI区の全体写真撮影(空撮)を行った。1面の国化記録作業を9月10日前後まで行い、その後にI区西半2面や下部トレンチの調査を行った。9月18~19日に重機による反転掘削を行い、II区(対象地東半)の調査を開始した。II区の遺構密度はI区に比べ著しく低く、近世墓の密集も無く、作業は迅速に進んだ。10月上旬にはII区の調査作業はほぼ終了し、10月3日に全体撮影(空撮)を行った。記録作業を終えた後、II区の埋め戻しを10月9~10日に行った。その後、遺物洗浄を現地にて行い、10月15日に機材を撤収して発掘調査を終了した。

2) 調査の方法と概要

(1) 調査の方法

調査は表土掘削と近世包含層の一部の掘削は重機で行った。以下の掘削作業は人力で行った。調査区の杭打ち(任意座標設定)と国土座標移動、対象地周辺測量は光波測量機を用いた。遺構の実測は手作業を行い、調査区内に割り付けた1/20図の作成を基本とし、一部の個別遺構について1/10図ないし1/5図を作成した。その他、調査区壁やトレンチの土層図を作成した。また近世遺構については、明らかに近世の遺構のみである遺跡の場合には、重要なものの以外はふつう調査対象としないため近世遺構は必ずしも調査対象にしなくてもよいという話もあったが、本調査においては、面的層位的に中世遺構と明確に分離できないこと(掘ってみると分からない)、近世遺構および包含層にも中世遺物が多量に入っていること、さらに六道銭や銅製品・鉄製品などの副葬品の出土状況が良好に遺存する土壤墓が認められ、地域の歴史上重要な部分があると判断できることから、結果的に調査の対象としている(先行する隣接の60次調査も同様的理由で調査対象としている)。ただし、その掘削(調査)の精粗や調査対象とするか否かや遺物取り上げについては個別遺構ごとに取扱選択している(特に甕棺)。近世遺構の大半を占める近世墓の扱いであるが、甕棺(陶棺)については事前協議に基づいて以下のようにしている(隣接する60次調査もほぼ同様である)。甕棺墓に多く遺存していた人骨については、妙徳寺が工事を発注している石材業者に引き取ってもらい、同寺で荼毘・

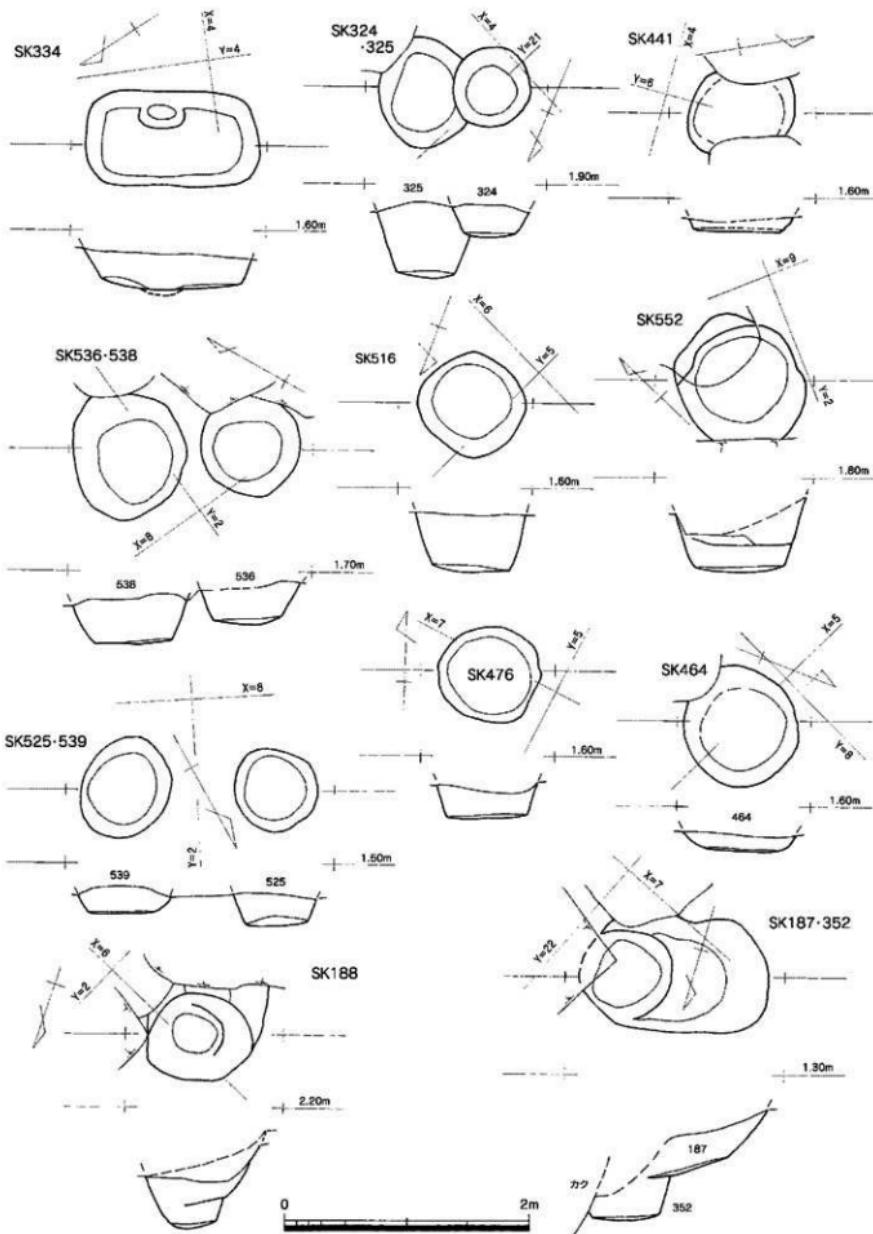


Fig.17 近世土坑実測図(1)(1/40)(SK334,SK324-325,SK441,SK536-538,SK516,SK552,SK525-539,SK476,SK464,SK188,SK187-352)

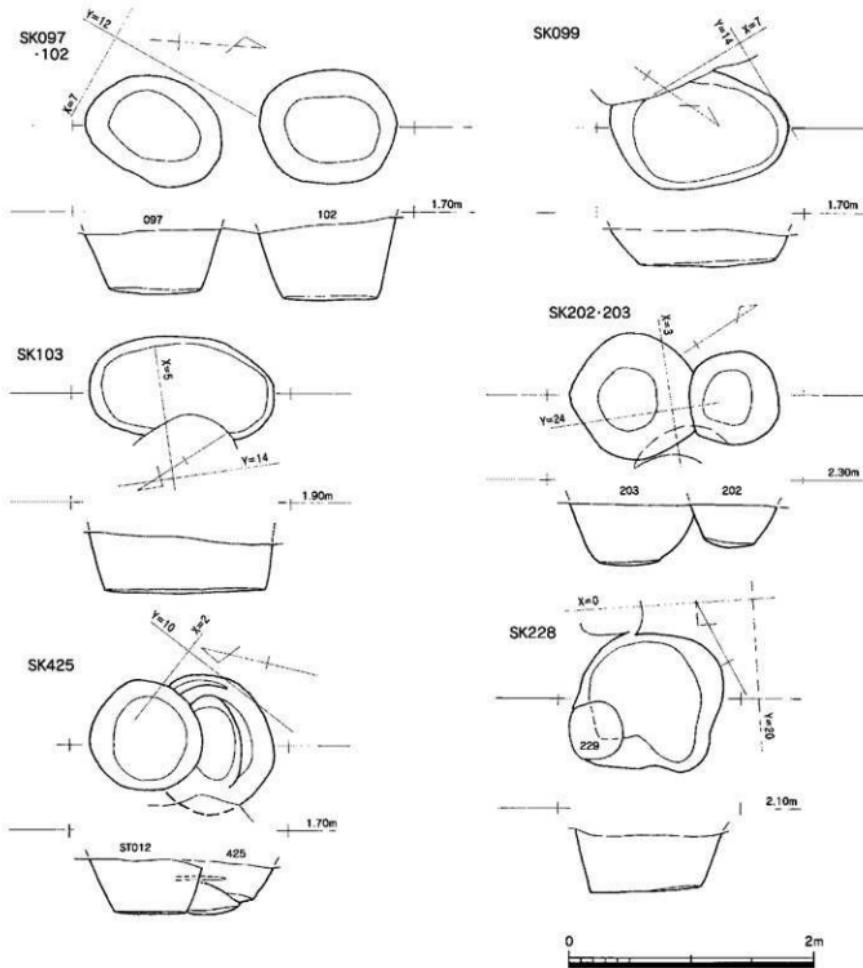


Fig.18 近世土坑実測図(2)(1/40)(SK097・102,SK099,SK103,SK202・203,ST012・SK425,SK228)

供養していただいている。また壺棺（陶棺）自体も、遺存が特に良い数個体を遺物として取り上げた他は、これも事前協議に基づき同業者に処分をしていただいていることを断っておく。また人骨については、主に壺棺内から出土して現場で明確に人骨と判断できたものは上記のように取り扱ったが、それ以外については、ひとまず遺物（動物遺存体）として取り上げた後に、分類・報告している。

(2) 調査の概要

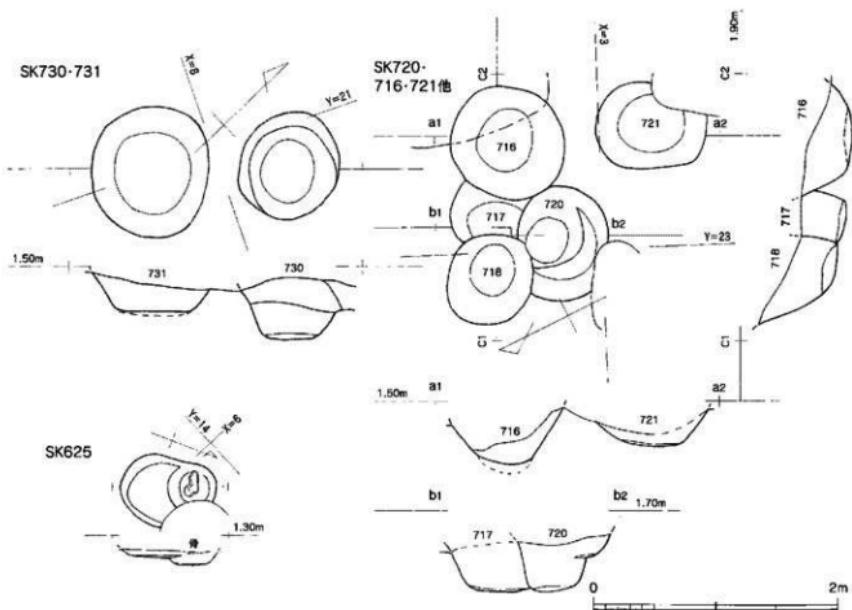


Fig.19 (中世～近世土坑実測図(1)(1/40)(SK730-731,SK716-718-720-721,SK625)

調査区西側2/3のI区ではきわめて濃密な遺構群を検出した。I区は大半が近世遺構、とりわけ近世墓が大部分を占め、遺構の重複が激しい。新しいもの（18世紀末以降一部近代前期か）は肥前系陶器の甕棺墓だが（少なくとも40基前後）、これらに切られる無数の土壙墓群がある。甕棺（陶棺）は下半部や底部しか残らないものが多く、一部併行する時間も想定されるが、総体として相対的に土壙墓群より新しい傾向が考えられる。土壙墓（桶棺）には銅錢（六道錢）や銅鉢・和鏡・煙管などの銅製品、和鉢・毛抜・刀子などの鉄製品を副葬するものも見られた。土師器皿のみを副葬するものも多く（完形小皿2枚のものが多い）、ごく一部は陶磁器容器類を副葬する。副葬品が明確でない遺構は中世遺物も含まれるため、近世と中世の遺構を画然と分離することは難しく、近世墓以外にも不明確ながら中世の土壙や柱穴も僅かにあるようである。I区西半2面でも、上面で不明であった近世土壙墓を検出した。下面検出遺構の多くも近世遺構だが、中世遺構が確実に存在する。I区東半は1面での調査のため、近世墓（大半が土壙墓）と少数の中世遺構が密集して混在している。近世墓は、調査区の西端と北端では分布が急に疎らとなり、砂丘の黄褐色砂上面が高くなる位置（落込みSX000の周縁部）になると近世墓の分布が激減している状況である。II区では近世墓はごく僅かとなり、近代以降の搅乱が多いが、遺構密度が薄くなる。中世遺構としては溝2条や井戸1、土壙墓1、土坑1、柱穴などを検出した。溝は平行して走行し、道路側溝の可能性もある。土壙墓や井戸は12世紀後半～13世紀前後か。柱穴は調査区北東部に多い。II区西端には、I区の落込みSX000の立ち上がりが検出された。

遺物は、12世紀以降の中世から近世までの土師器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器などのほか、銅製品（銅錢、和鏡、煙管、銅鉢など）、鉄製品（和鉢、毛抜、刀子、釘など）、木製品（近世墓桶棺の底板遺存）、動物遺存体（現場で判別できなかった人骨片を含む）、ガラス玉などがあり、

総量パンケース50箱分が出土している。

3. 検出遺構

1) 近世甕棺墓 (Fig.11・12)

近世後期以降の甕棺墓（陶棺）は、40基前後（攪乱に甕棺片が集中して廃棄されたものを含む）検出した。甕棺墓の分布には（Fig.4）、列状に分布するものや2棺並立のものがあるなど（Ph.4・5）、何らかの墓域設定の法則がある可能性もある。多くは上半部が欠失していたり（Ph.4・5）、底部のみの遺存のものも多い。上から下まで残っていた甕棺（一部欠損を含む）は5基のみであり、そのうちST12（Ph.5）を除く4基を廃棄せずに取り上げている。甕棺墓は多くの場合土壙墓を切っており、その逆の確実な例がないため、少なくとも近世幕末までの間ににおいては、総体として土壙墓→甕棺墓の変遷が考えられる（一部併行する可能性はある）。取り上げた4基の甕棺（ST845, ST019, ST001, ST031, Fig.11・12）は、1基が上師質の甕棺である（ST031）、他の3基は肥前系陶棺であり、その編年的位置から18世紀後半でも木頃を上限とし、19世紀前葉頃までのものであろう（近世甕棺葬年は下記文献を参考とした。下村哲1994「北部九州の近世墓に使用される棺蓋について」「先史学・考古学論究」熊本大学文学部考古学研究室 熊田考古会）。これら3基（およびST012）は、遺存状況や墓壙深度から本調査区で比較的古い甕棺と考えられるが、逆に言えば他の甕棺の時期もこの頃を上限とするであろう。周辺地域では、博多部では17世紀中頃から、それ以外では17世紀末～18世紀前葉から甕棺葬が一般化するとされる（下村哲1994）、本調査地点での甕棺葬の採用は比較的遅いと考えられ、箱崎地区全体に一般化できるかという問題もあるが、何らかの地域的歴史背景が存在するであろう。以下、各甕棺について記述する。

ST845 (Fig.11, PL.11-1) II区北西側で検出。棺蓋は、木蓋は遺存しないが、その上の板石が遺存していた。径110cm、深さ90cmの墓壙が遺存し、陶器甕（Fig.30）はほぼ直立て埋置している。

ST019 (Fig.11, PL.10-7) I区東半で検出。ST845と同様に棺蓋の板石が遺存する。110×140cm、深さ70cmの墓壙が遺存する（墓壙上部は不明）。陶器甕（Fig.29）は15°傾いて埋置されている。

ST001 (Fig.12, PL.10-5) I区西側で検出。墓壙上半は不明で、下半部の70×90cm、深さ45cmの墓壙が遺存する。これより下部の凹みは別の古い土壙墓であろう。陶器甕（Fig.28）は35°傾いて埋置されている。銅銭3枚と和鉄・毛抜が出土している。

ST031 (Fig.12, PL.10-6) I区西半中央で検出。墓壙上部から棺底部の一部まで攪乱があり、棺上半は破片となって落込み、棺底部の一部が欠損する。攪乱は改葬の掘削であろうか。棺甕は他と異なり土師質である（Fig.31）。棺甕はほぼ直立て埋置されている。銅銭（寛永通寶）4枚が出土。

なお上記の棺甕そのものについては、「4. 出土遺物」の項で報告する（Fig.28～31）。

2) 近世土壙墓 (Fig.13～16、およびFig.17～20)

I区において無数の近世土坑を検出したが、その大部分は土壙墓であろう。しかしながら「墓」と確実に推定できるものはその一部である。以下、人骨片が出土したもの、六道銭・鉄製和鉄・鉄製毛抜など近世墓の副葬品として通常有る遺物の出土や（完形土師器小皿のみでは不確実とした）、棺桶（棺板）の痕跡がみられたもの等について土壙墓として報告する。また遺構は非常に多いので、副葬品が出土していたり、遺構の遺存度が良好なものを中心取り扱った一部についてのみ報告した（Fig.4の遺構は主に報告議論を抽出して掲載した）。また以下の近世（および中世）の土坑・土壙墓については、紙幅の都合上、遺構の平面形や法量（規模・深度）の記述を省略する（図を参照）。多くの土壙墓は円形ピット状ないし逆截頭円錐形であり、これは木桶墓であった可能性高いが（A類）、一部に平面が長方形ないし隅丸長方形基調で比較的浅く底面も広いものがあり、これらは屈伸葬の木棺墓であった可

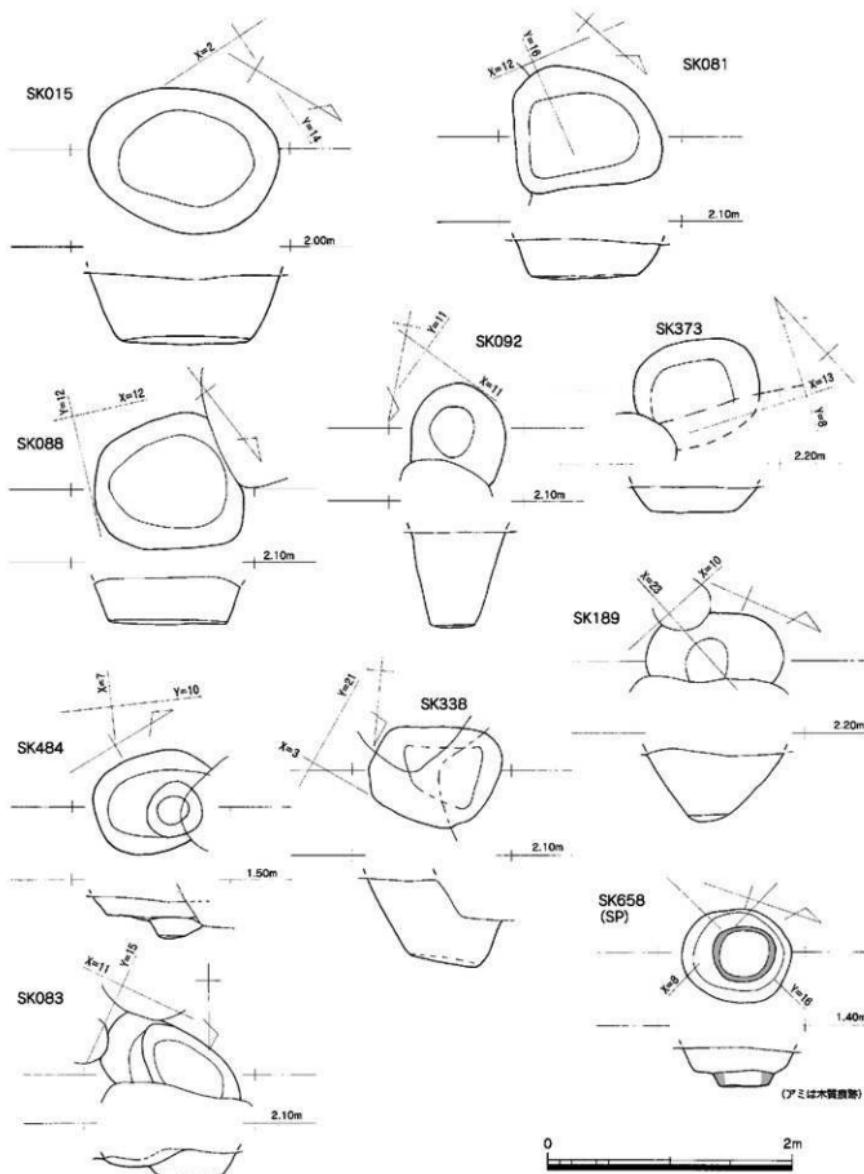


Fig.20 (中世～)近世土坑窯調査図(2)(1/40)(SK015,SK081,SK088,SK092,SK373,SK484,SK338,SK189,SK083,SK658)

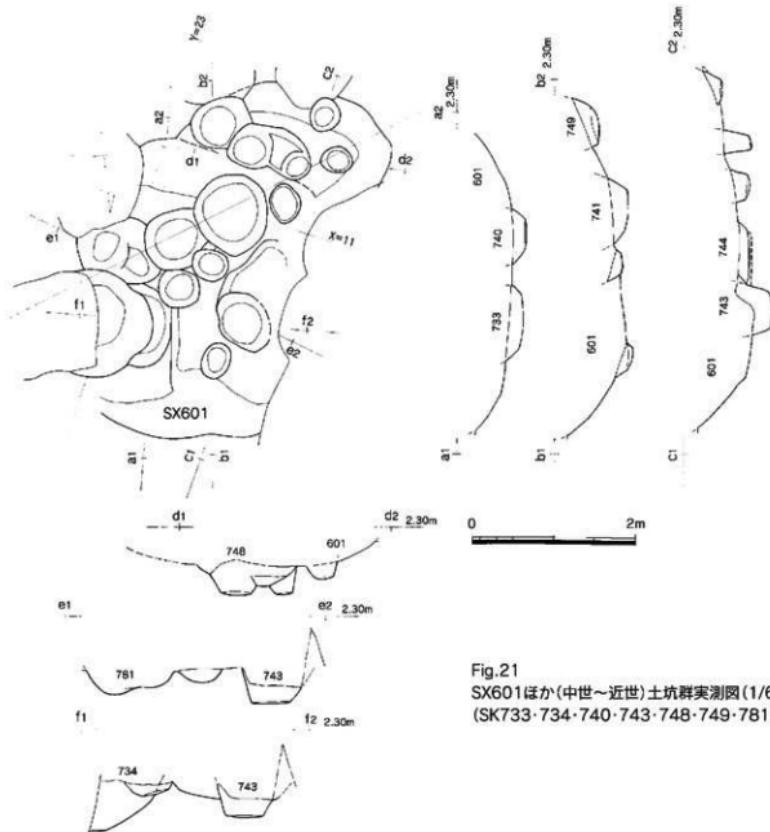


Fig.21
SK601ほか(中世～近世)土坑群実測図(1/60)
(SK733-734-740-743-748-749-781)

能性がある(B類)。A類には2段掘りのものもある。なお土師器壺・皿の分類と編年について、中世のみならず近世まで見通した編年案である楠瀬慶太2007を参照した(楠瀬2007「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相－博多窯跡群の土師器編年－」「九州考古学」第82号、以下「楠瀬編年(分類)」とする)。

SK361 (Fig.13左、PL.11-2) 遺物出土状況から土壙墓とした(A類)。土師器小皿は(Fig.34-23, 24)(楠瀬2007の「环B7」)だが本報告では径8.5cm前後以下の「环B7-8」は小皿と



Ph.6 SE801井戸側桶組出土状況(東から)

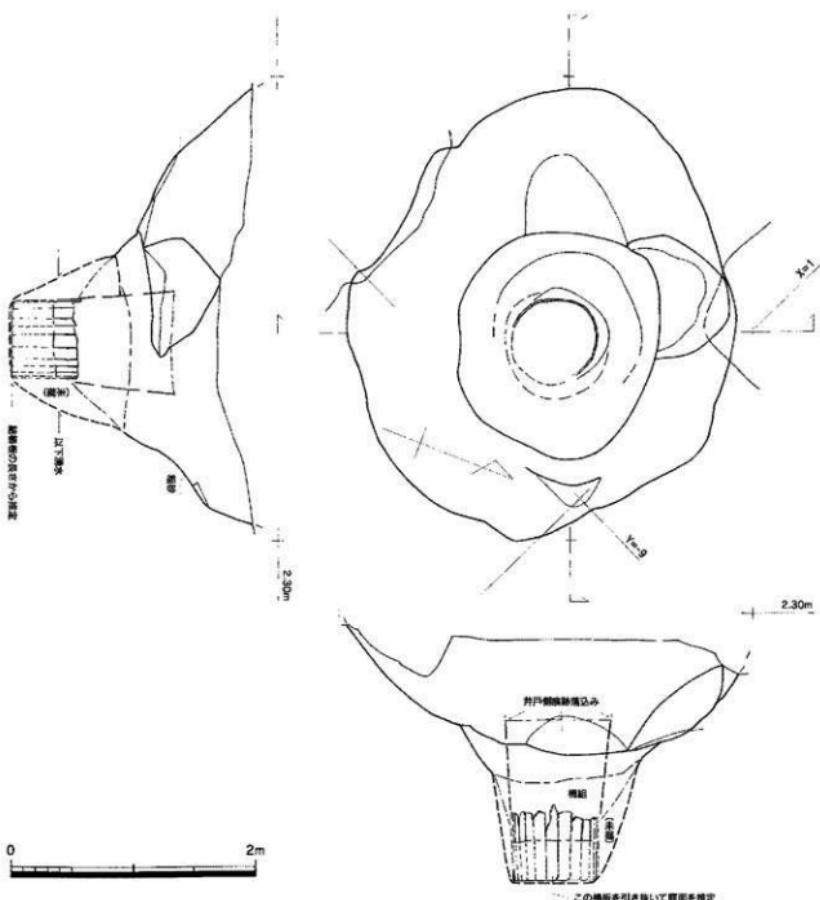


Fig.22 井戸SE801実測図 (1/40)

する)、18世紀(楠瀬編年図期)であろう。その他、和鉄(Fig.45-4)、銅鏡2枚(銅鏡は表7・8参照、以下同じ)などが出土した。

SK580 (Fig.13右、PL.2-4,5) 副葬品と言える遺物の出土と上層にヒト頭骨が出土し(他に種不明の長骨(表10)があるが人骨だろう)、土壤墓であろう(A類?)。南側は近代の攪乱。土師器(Fig.36-24,25)は、18世紀(図期)である。その他、仏具の打楽器である銅鉦(Fig.46-3)、銅鏡6枚が出土した。

SK363 (Fig.14左、PL.3-3) 遺物出土状況から土壤墓であろう(A類)。出土遺物(Fig.34-26,27)のうち小皿の型式から18世紀であろう。銅鏡(宋鏡)2枚のほか、未図化だが和鉄が出土している。

SK362 (Fig.14中、PL.2-3) 副葬品と考えられる出土遺物が多く、土壤墓であろう(A類)。土

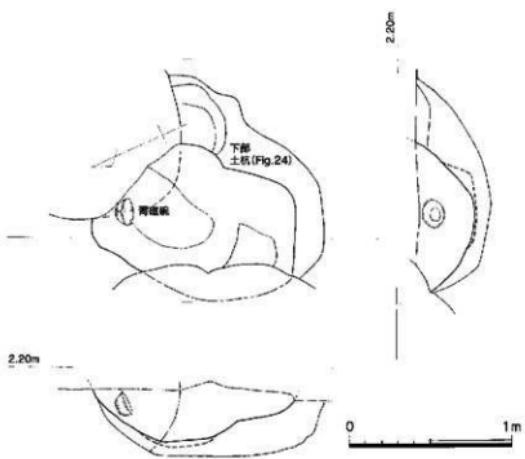


Fig.23 中世土壙墓SK837実測図 (1/30)

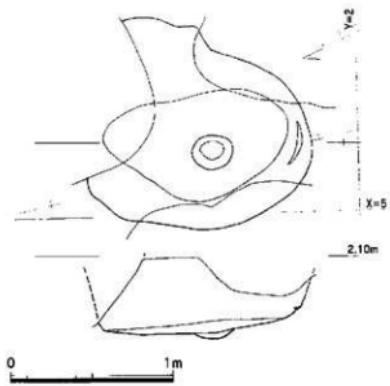


Fig.24 中世土壙SK837下部遺構実測図 (1/30)

SK312 (Fig.16左) 両端が欠損する35cm長の長骨が出土しヒトの大腿骨と認識できたので、土壙墓と判断した (B類?)。出土遺物 (Fig.33~36) の皿 (坏Bか) はVII期 (17世紀後半) であろう。

SK (SX) 106 (Fig.16右) 調査時は、複数の土坑・ピットの重複と判断して掘削し、図面も作成したが (Fig.16最右)、いずれも角礫が下部にあり、複数の遺構とするとその配置に矛盾があり、墓とする積極的な遺物は無いが、周囲の遺構との関連からも、底面に配石を有する土壙墓と判断したい。

以下は出土遺物などから整理中に土壙墓と判断したものである (Fig.17~20)。

師器小皿 (Fig.34~25,35) は18世紀代であろう。その他、和鏡 (柄鏡) (Fig.46~4)、銅鏡18枚 (全て寛永通寶) や、櫛が鍛造した和鉄1、毛抜1 (いずれも未図化) が出土している。

SK702 (Fig.14右、PL.3~1,2) 副葬品と考えられる出土遺物が多く、土壙墓であろう (A類)。最下層に木桶底板の木質痕跡 (金属器にも棺材遺存付着) があり、人骨片が認められた。出土遺物 (Fig.36~4~8・47~5) の土師器小皿の様相は、他の土壙墓よりやや古く、17世紀末~18世紀前半

(楠瀬編年VII期末~VIII期初め) であろう。下層面での検出と矛盾しない。土壙下層で和鉄・煙管・銅鏡・櫛が鍛造したもの (Fig.47~1,2)、銅鏡6枚などが出土した。下層に落ち込んだ土師器小皿の直上にウマないしウシの骨があるが、この意味 (副葬?儀礼?) は不明である。

SK701 (Fig.15左、PL.11~4) 1区西半2面で検出。桶底板が遺存していた。土壙墓A類。土師器小皿 (Fig.36~3) は18世紀代か。銅鏡6枚 (寛永通寶5枚) は六道鏡であろう。

SK321 (Fig.15右、PL.11~3) SK (SP) 322が覆土を切る。出土遺物 (Fig.34~1,2・38~1) の小皿は17世紀後半~18世紀 (VII~VIII期) か。その他、毛抜1、最下層で銅鏡9枚 (底板木質遺存付着)、他に銅鏡3枚がある。深いので井戸とも考えたが、六道鏡があり土壙墓A類である。

SK334 (Fig.17左列上段) 16世紀頃の粉青沙器 (Fig. 34-15, 16) があるが、完形の肥前系陶器塊（にぶい橙色胎土に黒褐色釉）(Fig.51-1, PL.12-12) は17世紀前半～中葉（肥前II期）の型式でありこれが伴い、年代の上限となる。六道銭（銅銭6枚銭種不明）や、未圓化だが刀子片（?）1、鉄状鉄製品1が出土し、土壙墓B類である。

SK325・324 (Fig.17中列上段) SK324が325を切る。SK325の土師器 (Fig.34-8～10) のうち小皿は18世紀代（Ⅷ期）か。銅銭6枚、および和鉄・毛抜（銅銭付着）が出土した (Fig.45-1,2)。SK324出土の土師器坏 (Fig.34-11, 12) は、楠瀬編年では不明確だが、18世紀末以降の窯棺ST019出土土師器 (Fig.32-7-8) の形態に繋がる型式で、18世紀末頃の坏とみておく。銅銭6枚が出土。両土坑ともに六道銭が出土し、土壙墓A類とする。

SK441 (Fig.17右列上段) SK362などに切られる土壙墓（A類？）。土師器坏・皿 (Fig.35-5, 6) の法量は18世紀代（Ⅷ期）より大きく、17世紀後半～末（Ⅶ期）に属するか。銅銭6枚があり、六道銭であろう。

SK536・538 (Fig.17左列2段目) SK536は寛永通寶を含む六道銭4枚（計25枚）があり、種不明の肋骨を出土し（人骨か？）、土壙墓A類であろう。一方、SK538は銅銭が宋銭1枚で、底径が広い土師器小皿などがあり (Fig.35-21～23)、近世ではなく中世（楠瀬編年IVb期？）の可能性もある。

SK552 (Fig.17右列2段目) 寛永通寶4枚があり、六道銭とすれば近世土壙墓であろう（A類）。

SK476 (Fig.17中列3段目) 土師器小皿 (Fig.35-11, 12) は「坏B8」（楠瀬分類）とすれば、18世紀（後半？）か。銅銭6枚（寛永通寶1枚）は六道銭であろう。土壙墓A類。

SK188 (Fig.17左列下段) 土壙墓A類。土師器坏・皿 (Fig.36-27, 28) は、底径が小さくなる型式で、ST019出土土師器とも類似し、楠瀬編年では不明確だが19世紀前半（IX期）の可能性がある（28は型作りの可能性もある）。銅銭1枚のほか、和鉄1と毛抜1 (Fig.45-7) が出土している。

SK097 (Fig.18左列上段) 寛永通寶6枚と宋銭1枚が出土し、六道銭と考えられ、土壙墓であろう（A類）。出土遺物 (Fig.33-1～6) のうち、5-6の小底径の小坏がありST019の小坏 (Fig.32-7-8) に繋がる型式と思われ、18世紀末かそれ以降（19世紀初頭頃？）の年代が推定される。

SK099 (Fig.18右列上段) 銅銭6枚があり、銹着して銭種不明だが六道銭であろうから近世土壙墓と判断する（B

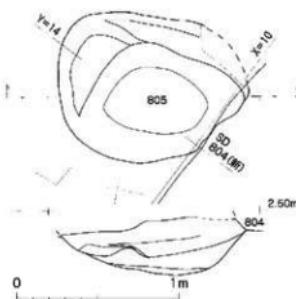
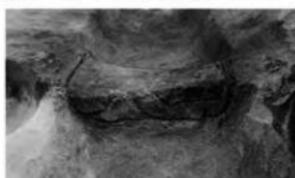


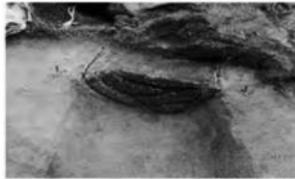
Fig.25 中世土坑SK805実測図 (1/30)



Ph.7 SD802土層断面① (西から)



Ph.8 SD802土層断面② (東から)



Ph.9 SD803土層断面 (西から)



Ph.10 SD804土層断面 (西から)

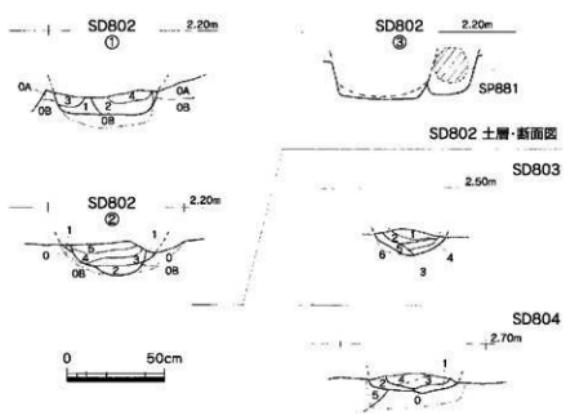


Fig.26 SD802,SD803,SD804土層図・断面図 (1/25)

類?)。ヒトの頭蓋骨片が出土している。

SK103 (Fig.18左列中段) 寛永通寶5枚があり、六道銭であろう。土壤墓B類とする。完形土師器 (Fig.33-7,8) は、「环B7」としては径の大きいもの(7)を含み、Ⅷ期のうちⅦ期に近い18世紀初頭前後か。

SK425 (Fig.18左列下段) 陶器壺棺ST12に切られる。出土遺物 (Fig.35-2~4) のうち土師器小皿から18世紀代であろう。寛永通寶5枚があり、六道銭であろう。土壤墓A類とする。

SK228 (Fig.18右列下段) 土師器小皿 (Fig.34-36) は18世紀代 (Ⅷ期) であろう。銅鈴 (Fig.46-2) があり、副葬品と考えられ、土壤墓A類とする。SP227で種不明の長骨片が出土するが、SK228に伴う人骨か。

SK731 (Fig.19左上) 銅錢4枚や和鉄・毛抜・櫛が銹着したものがあり (Fig.45-6) 、副葬品であろう。土師器小皿 (Fig.34-37) は「环B7」であろうが、底部形態はⅦ期に近い。土壤墓A類。

SK720 (Fig.19右) 1区西半2面。銅錢6枚を出土。完形の土師器小皿があり (未図化) 、18世紀代か。SK720が近世土壤墓A類ならば、重複するSK716やSK718 (Fig.19右) も同様であろう。

SK721 (Fig.19右) 六道銭として寛永通寶5枚がある。土壤墓A類。完形の土師器小皿があり (未図化) 、18世紀代か。その他、和鉄・毛抜・櫛が銹着したものがあり (未図化) 、副葬品であろう。

SK015 (Fig.20左列上段) 完形の土師器小皿は小底径で器壁が薄く (未図化) 、18世紀末~19世紀初頭か。和鉄・毛抜・櫛と銅錢3枚が銹着して出土している (Fig.46-1) 。

SK658 (Fig.20右列下段) 中央下部がピット状となる。下部検出時にピット縁部に木質痕跡があり、何か木枠のようなもの (曲物?) があった可能性がある。上段部の土壤状部分から和鉄が出土し、上部は近世土壤墓であろう。一方、下部ピットは海獣 (イルカ) 類の骨が出土し、古い別遺構の可能性がある (中世か?)。出土遺物 (Fig.35-34~36) のうち、土師器小皿 (34) は18世紀代か。

SK281 (Fig.51) 近世壺棺ST006に切られる。土師器小皿と肥前系陶器塊が完形で出土し (Fig.51-2~3) 、副葬品の可能性が高い。ただし六道銭など他の副葬品は無い。土壤墓とすればB類。灰白色

SD802上層①

- 0A 黒褐色、ややくろい(浅) 黄褐色砂、細砂、1~2mm大粒、しらりやかあり
- 0B 山形山、町青褐色砂、粗砂、0A層より粗い。1~2mm大粒、2~3mm大粒少し。しまりやかせん。
- 0 層にない明黄色砂、細砂 (やかにぶい色)。にほん色
- 1 層にない黄褐色砂、細砂 (やかにぶい色)。にほん色
- 2 層にない(やかにぶい)黄褐色砂、細砂、にほん色、黒褐色砂混在。しらりやか
- 3 「やかにぶい」黄褐色砂、細砂 (やかにぶい色)。にほん色
- 4 「やかにぶい」黄褐色砂、細砂少々+にほん色
- 5 しらりけん、黒褐色砂 (やかにぶい) 黄褐色砂 + 黑褐色砂、黒褐色砂か?

SD802上層②

- 0 黒褐色、町青褐色~町青褐色砂、底成砂か、しまりやかせん。0層+底 成砂+底成砂色砂、細砂。しらりやかあり
- 1 0層+底成砂色砂の汚れわざかに、しまりやか
- 2 「やかにぶい」黄褐色砂、少し黒褐色砂。にほん色
- 3 「やかにぶい」黄褐色砂 (やかにぶい色)。にほん色
- 4 「やかにぶい」黄褐色砂 (やかにぶい色)。にほん色
- 5 「やかにぶい」黄褐色砂 (やかにぶい) 黄褐色砂 + 木葉砂、底成砂

SD803土層③

- 1 にほん黄褐色砂+町青褐色砂、クマノ耳根 (底砂) ランナー入り。0層+底成砂少々+底成砂あり
- 2 底成砂色砂 (底成砂) (底成砂) 黄褐色砂+底成砂 50%+にほん黄褐色砂 50%、1~3mmより多い。
- 3 底成砂色砂 (底成砂) (底成砂) にほん黄褐色砂+底成砂
- 4 5mmより多い、にほん黄褐色砂+底成砂 50%以上。少し粗砂混入
- 5 「やかにぶい」黄褐色砂 (底成砂) 黄褐色砂+底成砂色砂 50%以上。少々粗砂混入
- 6 「やかにぶい」黄褐色砂+底成砂 (底成砂) 黄褐色砂+底成砂 (底成砂) にほん黄褐色砂+底成砂

SD803土層④

- 0 連続層+町青褐色砂+細砂、底成砂地山
- 1 サラナリった黄褐色 (~底成砂) 黄褐色+にほん黄褐色 (3層) クリシ (こじこじ) なし
- 2 にほん黄褐色砂 (底成砂) (底成砂) にほん黄褐色
- 3 にほん黄褐色砂+底成砂 50%
- 4 底成砂色砂+底成砂色砂 (底成砂) にほん黄褐色砂 20%
- 5 にほん黄褐色砂+にほん黄褐色+にほん黄褐色 (~にほん黄褐色) (底成砂) (底成砂) 50%より薄り、粗じゅうなり

表4 SD802,SD803,SD804
土層図・断面図 (Fig.26) 注記

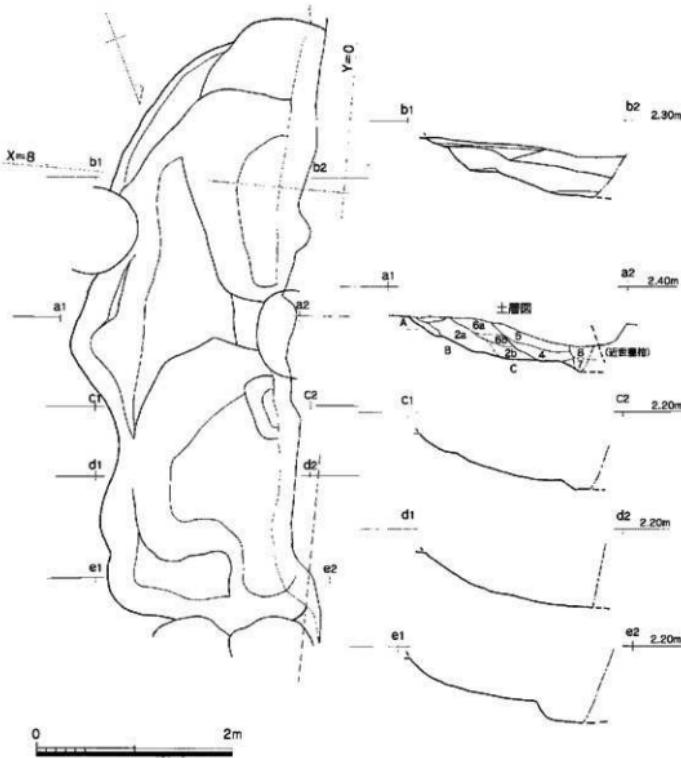


Fig.27 落込みSX830実測図・土層図 (1/50)

の胸器塊（翌付は骨胎）は端反り気味で肥前II期（17世紀前半～中葉）であり、この年代が上限となる。土師器小皿は楠瀬編年Ⅶ期（17世紀後半）の「坏B7」だろう。近世墓群中では初現期の遺構か。

3) 近世土坑（土塚墓であるか不確実なもの）

以下は近世の土坑であるが、その可能性も十分あるが、土塚墓とするには根拠不足なものである。

SK516 (Fig.17中列2段目) 完形の土師器小皿が出土し (Fig.35-16~18)、18世紀代の「坏B7」であろう。副葬品とすれば土塚墓の可能性がある。

SK525 (Fig.17左列3段目右) 出土した完形の土師器小皿は (Fig.35-19,20)、楠瀬編年Ⅶ期の「坏B8」か、Ⅷ期の「皿B12」ないし「B13」であろ

- A 土色褐色～淡青褐色 (細砂+少、粗砂わずか)、風成砂か
- B 土よりやけに濃い灰青褐色～青色、1~2mm大粒 (中や重砂) 主体、1~3mm砂、1~5mm大粒 (MLL) 颗粒状
- C 土よりに濃い (褐) 黄褐色 (～に濃い青褐色) 砂・粗砂、1~3mm大粒 (大粒粗砂はB層にかなり多い)
- (B・C層は同じ地質)
- 1 土よりやけに濃い灰青褐色 (2層より下半部) (黄褐色砂質層)、1~2mm大粒、2~3mm大粒が多い、A・B層より少しあり
- 2 よくくぼむ
- 2a 2層よりさらに近い、黄褐色～濃い黄褐色 (～に濃い青褐色) 砂・粗砂、粗粒を含む、1~2mm大粒主体、3~4mm大粒の中少、5mm以上は少く、1層よりやけしまる
- 2b 2層よりやけしまる、1層よりやけしまる、に濃い青褐色～濃青色 (～に濃い青褐色) 砂・粗砂 (7.5YR)、2a層よりしまりやけあり、5層よりやけしまる、1~2mm大粒主体、3~4mm大粒、5mm以上少し
- 3 土層とは別地質
- 4 土層ともやけに濃い青褐色、若干粗粒を含む、2~4mm大粒減少し、しまり2層より多く
- 5 土よりやけし、に濃い青褐色～に濃い青褐色 (GY9) 砂・粗砂、2a層よりやけし、しまりやけあり、1~2mm大粒、3~4mm大粒、5mm以上は少く
- 6a 2a層よりやけし、5層に近い、やけやけい青褐色～濃青色 (～に濃い青褐色) 砂・粗砂 (7.5YR)、2a層よりしまりやけあり、5層よりやけしまる、1~2mm大粒主体、3~4mm大粒、5mm以上少し
- 6b 土層とは別地質、6a層より下半部に濃青色を作れ、砂の質は2a層と似た地質
- 7 土よりやけにくく白色、に濃い青褐色 (～に濃い黄褐色) 砂・粗砂や粗砂、1~2mm大粒、3mm以上少く、しまり少なし
- 8 土よりやけし、やけやけい青褐色～青色 (～に濃い青褐色) 砂・粗砂、粗粒3mm大粒以上少く、しまり少なし、7層よりせい、7~8層間に青色あり
- 9 に濃い青褐色、しまり (中や) 少い、地表上いる

表5 落込みSX830 土層図 (Fig.27) 注記

う。近世の土坑と思われる。

SK740 (Fig.21) 大型土坑SX601の下部で検出した。種不明の骨片があり、近世土坑（土壤墓？）の可能性がある。その場合はSX601上部から掘り込みがあったのであろうが分からなかった。その他、SX601下部の検出遺構のうち、**SK734**も近世土坑（土壤墓？）の可能性がある。出土した土師器小皿 (Fig.41-31) は近世（楠瀬編年図期）に下る可能性がある。



Ph.11 発掘調査作業状況 (II区、東から)

4) 時期不詳（中世～近世）の土坑

以下は中世の可能性がある土坑であるが、近世である可能性も否定できないものが多い。遺物が小片のみであったり（近世遺物があっても小片なら混入かもしれない）、遺存度が高い遺物が土師器皿のみの場合（中世と近世に似た法量・形態が存在することがある）、時期が限定できない場合が多い。

SK539 (Fig.17左列3段目左) 出土遺物 (Fig.35-28,29) は中世前半期のものがあり、中世の可能性もあるが、周囲遺構との関係からすると近世土坑の可能性を排除できない。

SK464 (Fig.17右列3段目) 15～17世紀の足笠片 (Fig.35-1) がある。宋銭があるが1枚で、六道銭とは言えない。またSK464に切られるSK463は遺物 (Fig.35-9,10) から中世の可能性がある。

SK187・352 (Fig.17右列下段) 2段掘り状になっているが、おそらく上部の**SK187**が近世土坑で、下部の**SK352**は中世土坑であろう。出土遺物 (Fig.34-19～21) は下部SK352に伴うか。

SK102 (Fig.18左列上段) 出土した土師器小皿 (Fig.33-9,10) は、18世紀（図期）の「坏B7」の可能性があるが、中世（IVb～Va期）の可能性も排除できない。土壤墓かどうかも定かではない。

SK202・203 (Fig.18右列中段) SK202がSK203を切る。SK202からは宋銭が出土し、中世後半と考えられる土師器壺が2点出土している（未図化）。近世の可能性を排除できないが、中世としておく。SK203は掘り込みもやや深く、口禿の白磁塊 (Fig.33-21) が出土し、13～14世紀頃であろう。

SK730 (Fig.19左列上段右) I区西半2面で検出。隣接する近世土壤墓SK731より明らかに深い掘削であり、これを掘削時の地表面の差と考えれば中世土坑の可能性もあるが、詳細不明である。

SK625 (Fig.19左列下段) I区西半2面。ウマの頭骨を出土。柱穴か。中世に遡る可能性がある。

SK081 (Fig.20右列上段) 青磁片2点 (Fig.32-27,28) があり、底径がやや広い土師器小皿片もあり、中世（13世紀代）の土坑であろう。ただし種不明ながら骨片があり、土壤墓の可能性はある。

SK088 (Fig.20左列2段目) 時期不詳だが、出土した瓦片 (Fig.44-6) は中世の可能性が高い。

SK092 (Fig.20中列2段目) 東播系須恵器の捏鉢片がある (Fig.32-20)。13世紀頃か。

SK373 (Fig.20右列2段目) 青磁塊があり (Fig.34-28)、これが伴えば12世紀後半頃である。

SK484 (Fig.20左列3段目) 下部にピット状の凹みがある土坑。土師器小皿 (Fig.35-13) は、中世前半期（IIb～IIIb期）の可能性がある。

SK338 (Fig.20中列3段目) SK218（近世か）と擾乱181の間で検出。遺物は小片が多いが、近世に下る遺物は含まれておらず、中世の可能性が考えられる。

SK189 (Fig.20右列3段目) 出土した土師器小皿 (Fig.33-15) はIVb～Va期の法量・形態の可能性があるが、図期（18世紀代）の坏B7の可能性も排除できず、時期が限定できない。

SK083 (Fig.20左列下段) 2段掘り状であるが、遺構の重複かもしれない。土師質の捏鉢があり

(Fig.32-19)、東播系須恵器の模倣ならば12~13世紀であろうが、造構の時期を示すか不明である。

SX601 (Fig.21, PL.9-1) I区西半2面で検出の大型土坑。攪乱で一部破壊され、調査区外に延びており全体は不明確だが、およそ4×5mの梢円形、すり鉢状断面をなす。下層ないし底面で複数の土坑やピットを検出したが、一部は上部からの掘り込みであろう。SK734は、土師器小皿 (Fig.41-31) が18世紀代 (Ⅶ期) の「坏B7」の可能性があり、近世土壤墓かもしれない。SK733とSK743からは龍泉窯系青磁が出土し (Fig.36-9, 10)、これが伴うなら13世紀中頃~14世紀前半でありSX601以前となろう。SK601自体は、備前焼鉢 (Fig.35-33) が14世紀後半~16世紀、青磁 (Fig.36-1) は龍泉窯系IV類またはV-2類 (14~15世紀) であり、混入のおそれもあるが造構の時期幅を示すと考えられ、落込み造構SX000より新しい。その他、SK740からは種不明の骨片が出土した。

5) 中世井戸

62次調査では井戸は1基のみである。本地点での井戸の少なさは箱崎の中世都市域の外縁部であることを示す。

SE801 (Fig.22, Ph.6, Ph.11-6、裏表紙写真左上) II区で検出した。上面は3.2×3.8mの梢円形、検出面から80~100cmで掘り方が狭まる。掘り方上半には構築 (掘削) 時のステップかとも思われる段がある。上面から70cm強で井戸側の落込みを確認した。井戸側自体は最下部の1/2周のみ遺存した円形の桶組である (湧水がある最下部も半分の遺存であるのは、満東時に井戸廻材を回収しているためか?)。周囲の地山砂が脆く崩落のおそれがあったので最下層は掘削していないが、桶材の長さから井戸の最下部レベルを推定して

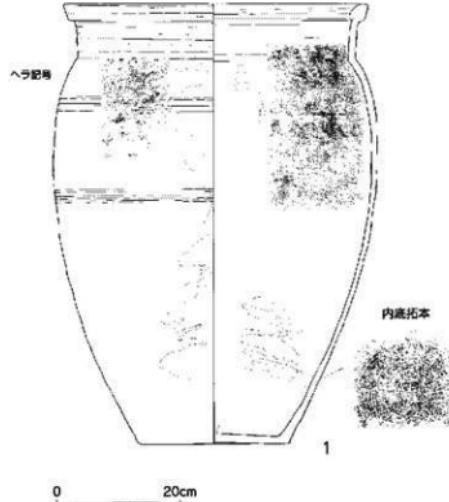


Fig.28 ST001陶器甕棺実測図 (1/8)

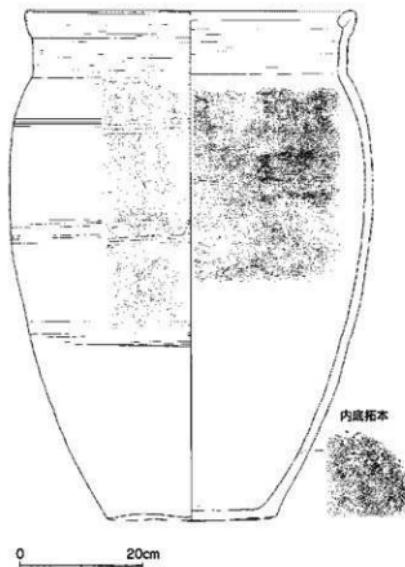


Fig.29 ST019陶器甕棺実測図 (1/8)

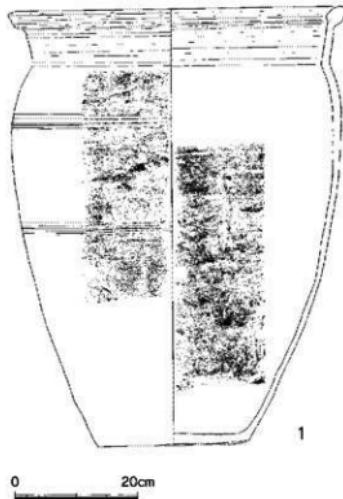


Fig.30 ST845陶器甕棺実測図 (1/8)

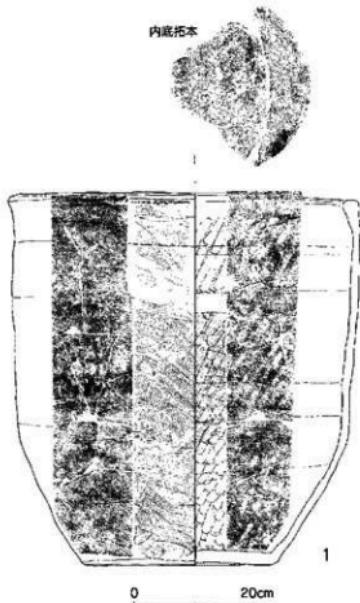


Fig.31 ST031土師甕棺実測図 (1/8)

いる。最下層は調査時も湧水が認められた。

中世前半期の土器・陶磁器 (Fig.36-23, 37-1 ~11, 38-2~4ほか)、中世の瓦 (Fig.44-1~3ほか)、鉄製品 (長釘か) が出土している。井戸側落込み確認以下は、掘り方と井戸側内の遺物を分けて取り上げているが、いずれも12世紀中頃～後半のものが含まれる。ただし掘り方には12世紀前半までの遺物が一定量あり微妙な時間差を示すか (13世紀後半の陶器やV類であるFig.38-4は掘り方出土とあるが、井戸側落込み確認前の上層出土の可能性がある)。

6) 中世土壙墓および土坑

SK837 (Fig.23, PL.11-5) II区西側で検出した75×135cm前後の不整梢円形土坑。完形の青磁塊が出土し、副葬品と考えられる。掘り方が2段状であり、本米は中央の深くなる部分に木桶 (木櫃) があったと思われ、青磁塊は棺外副葬であろう。青磁塊は12世紀後半の型式 (Fig.36-18)。他に青白磁の合子蓋 (Fig.36-19)などがある。SK837の調査後に周囲と下部がさらに掘削できたが、下部にあった別土坑であろう (Fig.24)。土師器壊片があり (Fig.36-17)、12世紀中頃～後半と考えられる。

SK805 (Fig.25) II区東側で検出。90×130cm前後の土坑。掘り方途中で北・東側がテラス状になる。遺物は破片のみだが、中世土師器鍋片があり (Fig.36-20)、13~14世紀頃であろうか。

7) 溝状遺構 (中世～近世)

SD802 (Fig.4-5、土層・断面図はFig.26、土層Ph.7-8、PL.10-1) II区南縁辺に沿って検出したN-57' - W前後の直線的な溝。幅50~80cmの遺存で、深さ20cm程度の遺存で、かなり削平されている。断面は逆台形ないしU字形となる。55次I区のSD001から連続する溝。I区では近世の遺構・包含層のため不明確であったが⁶ (以下Fig.5参照)、I区東半のSK513、撫乱285の南側で僅かにSD802の延長らしき溝の痕跡があった。またI区西半でもSK088から撫乱086にかけての南側にも同一線上の溝の痕跡があった。また落込みSX000の南辺はSD802の

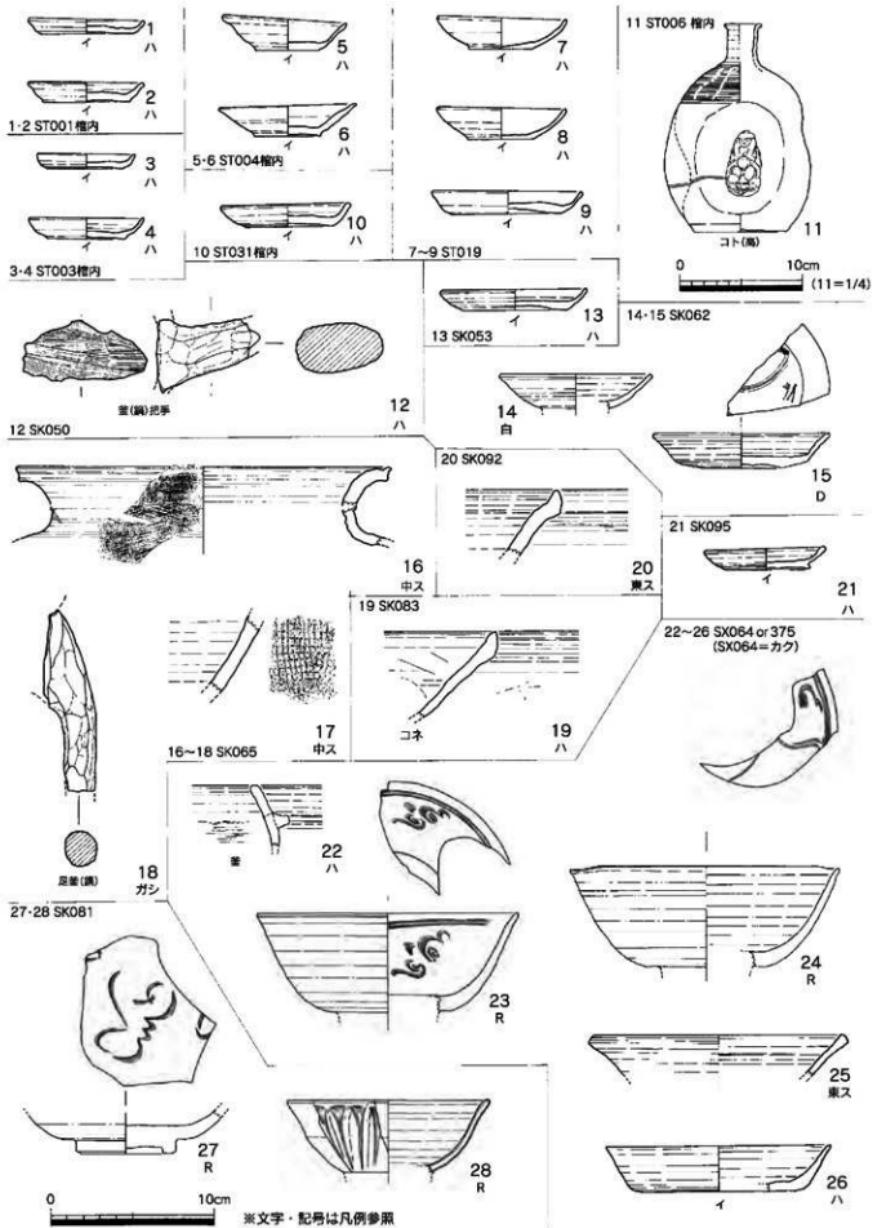


Fig.32 近世豪華墓出土および遺構出土中近世土器・陶磁器実測図 I (1/3, 一部1/4)

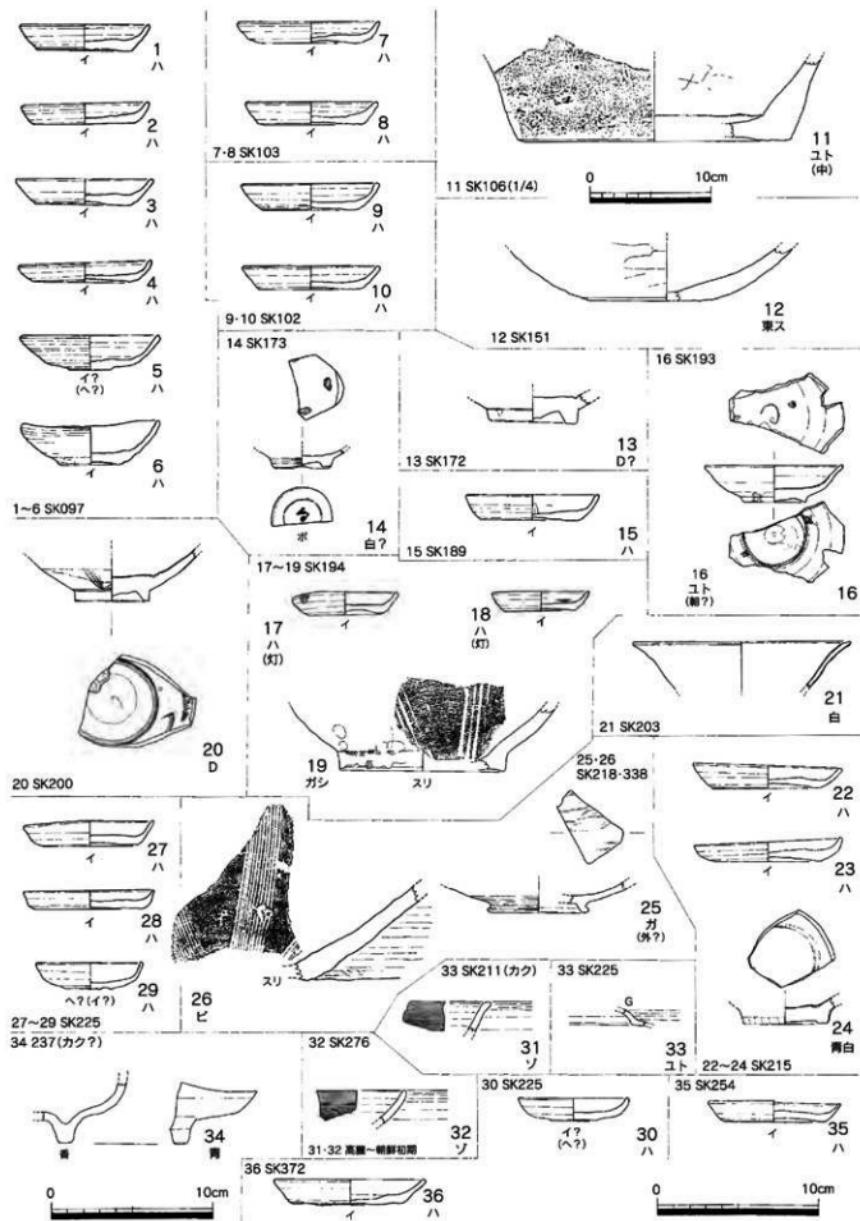


Fig.33 遺構出土中近世土器・陶磁器実測図Ⅱ (1/3, 一部1/2・1/4)

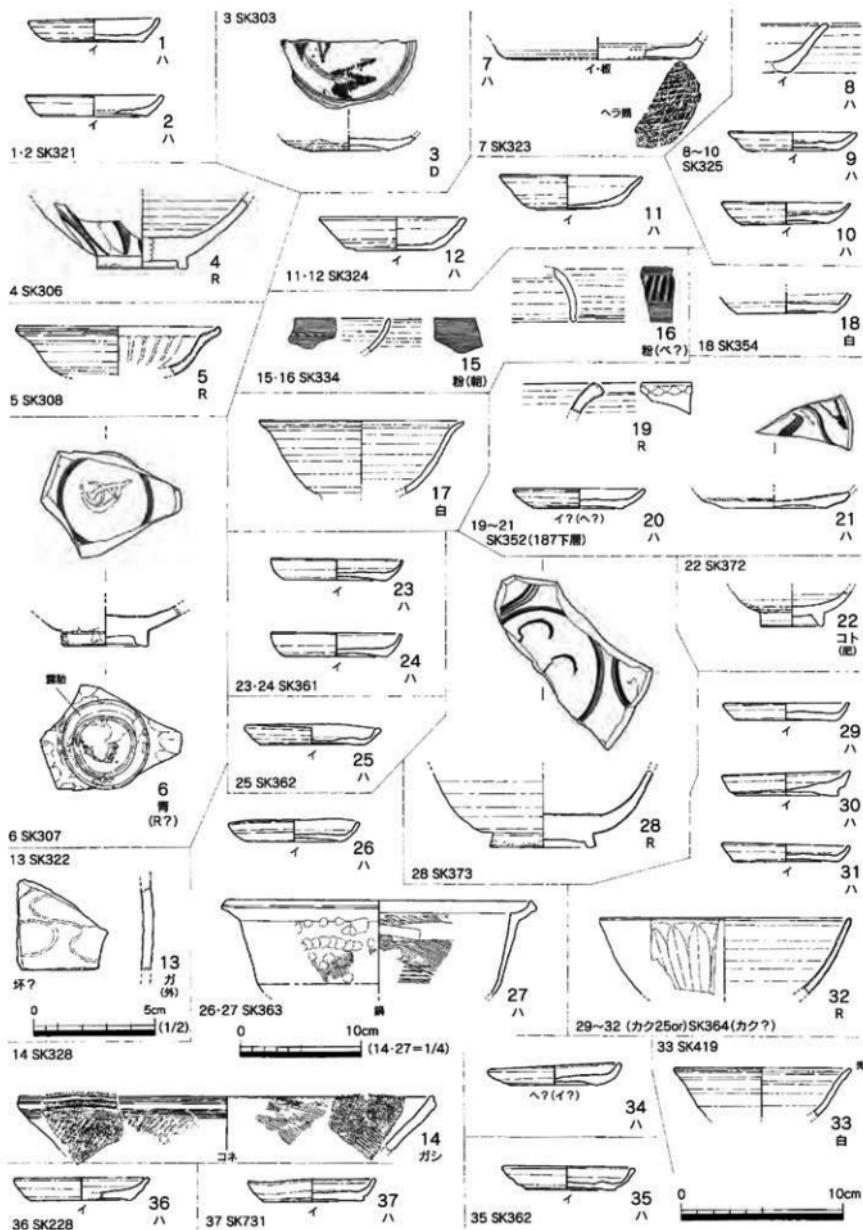


Fig.34 遺構出土中近世土器・陶磁器実測図Ⅲ（1/3、一部1/2・1/4）

延長ラインと関係があり、近世土壙墓の分布の大部分もこの延長線上を南限とする。SD802-II区でSP881を切るが、SP881出土の四耳壺（Fig.36-15）が溝の上限を示す。SD802の出土遺物は、陶磁器類は12世紀代が多いが（Fig.39-1～3,6）、土師器小皿（Fig.39-4,5）はやや新しい13世紀後半～14世紀前半を含むか。土層から溝は掘り直しがある可能性があり、時期軸の存在がありうる。その他、I区SK305（攪乱？）の南側にSD802の線上に接して平行するSD307があるが（Fig.5）、重複するSX308はSD802の延長の一部とも見られる。

SD803 (Fig.5、土層はFig.26・Ph.9) SD802と平行する溝。I区（西側）とII区（東側）は途切れていますが、深くても15cmしか遺存しないので、これは削平によるもので本来は同一であろう。55次I区のSD002またはSD125から続く溝だろう。SD802と並列する道路側溝の可能性もあるが（PL.10-1）、SD803には18世紀代の遺物まで含む。中世溝の凹み（溝痕跡）を近世に再掘削したものか。

SD804 (Fig.5、土層はFig.26・Ph.10) I区東縁でのみ検出。深くて10cmしか遺存せず、削平が著しい。55次SD004の延長であろう。小破片が多いが12～13世紀の遺物があり、SD802と同時期。芯々5.5mで平行し、SD802とともに道路側溝かもしれない。

8) 落込み状遺構（中世）

SX830 (Fig.27、PL.3-4・11-7) II区西辺で検出。「基本層序」で触れた落込みSX000 (Fig.4) の東縁部。立ち上がりは緩い斜面で途中がテラス（段）状となる。主に12世紀代の遺物を含むが（Fig.40-1～6）、土師器壺は13世紀後半～14世紀初頭（Fig.40-5）の型式を含み、掘削はその頃であろう。

4. 出土遺物

1) 近世窯棺（大甕）(Fig.28～31)

ST001 (Fig.28、PL.12-1) は肥前系陶器甕。以下の肥前系陶器甕はいずれも「押川窯」系であろう。口径49cm、器高72.5cm、最大径53.2cm。口縁部は内面に折り返し肥厚させる。体部外面はタタキ（網文？）→ロクロナダ→ナデ、上位と中位に螺旋沈線帯と平行沈線帯がある。内面は粘土帶輪積痕が一部残り、タタキ（格子目当具）→ロクロナダ。内底はタタキをナデ消す。釉かけは、釉を横にして施釉後反転し、残り半分を施釉後、さらに口縁部を下にして立てている。下地が鉄サビの暗赤褐色で、にぶい赤褐色釉がかかる。下村智1994（前掲）のVc類だが、口縁部内面肥厚が内傾し、最も新しい一群だろう。18世紀末～19世紀初頭に下るか。なお取り上げなかったST012の陶器甕は（Ph.5左）、同じVc類でも内面肥厚がさほど内傾せず、やや古い（18世紀後半の幅内）であった可能性がある。**ST019** (Fig.29、PL.12-2,3) は肥前系陶器甕。口径53.3cm、器高83.6cm、最大径59.6cm、底径27.7cm。いわゆる「ハンドウガメ」タイプで、口縁部が玉縁状に内面に肥厚する。体部外面は網文タタキ→ロクロナダ→一部ナデ、中位2箇所と下位に螺旋沈線帯があり、上位に平行沈線帯がある。体部内面はタタキ（格子目当具）→ロクロナダ。内底は格子目タタキを残す。外面は、鉄サビかけ→鉄釉流しがけ→ハケ状工具で釉のぼしする。内面は鉄サビ→鉄釉ハケぬりである。下地鉄サビの暗赤灰色で、明赤褐色不透明釉がかかる。下村1994のⅢd類で、18世紀末～19世紀前半の型式か。ST001やST845より新しいと考えられる。**ST845** (Fig.30、PL.12-4,5) は肥前系陶器甕。口径54cm、器高69.6cm、最大径54.2cm、底径25cm。口縁部は内面に折り返し突堤状となる。底部はやや不安定な平底。体部外面は（タタキ→）ロクロナダ、体部中位と上位に螺旋状沈線帯がある。タタキ（格子目当具）→ロクロナダ。内底はナデ消す。内面は鉄釉の上から灰白色のナマコ釉上がり。下地はにぶい赤褐色で、暗赤褐色不透明釉がかかる。下村1994のVc類だが、ST001と同様に口縁部内面肥厚が内傾し、新しい一群だろう。**ST031** (Fig.31、PL.12-6～9) は、これのみ土師質である。甕というより大

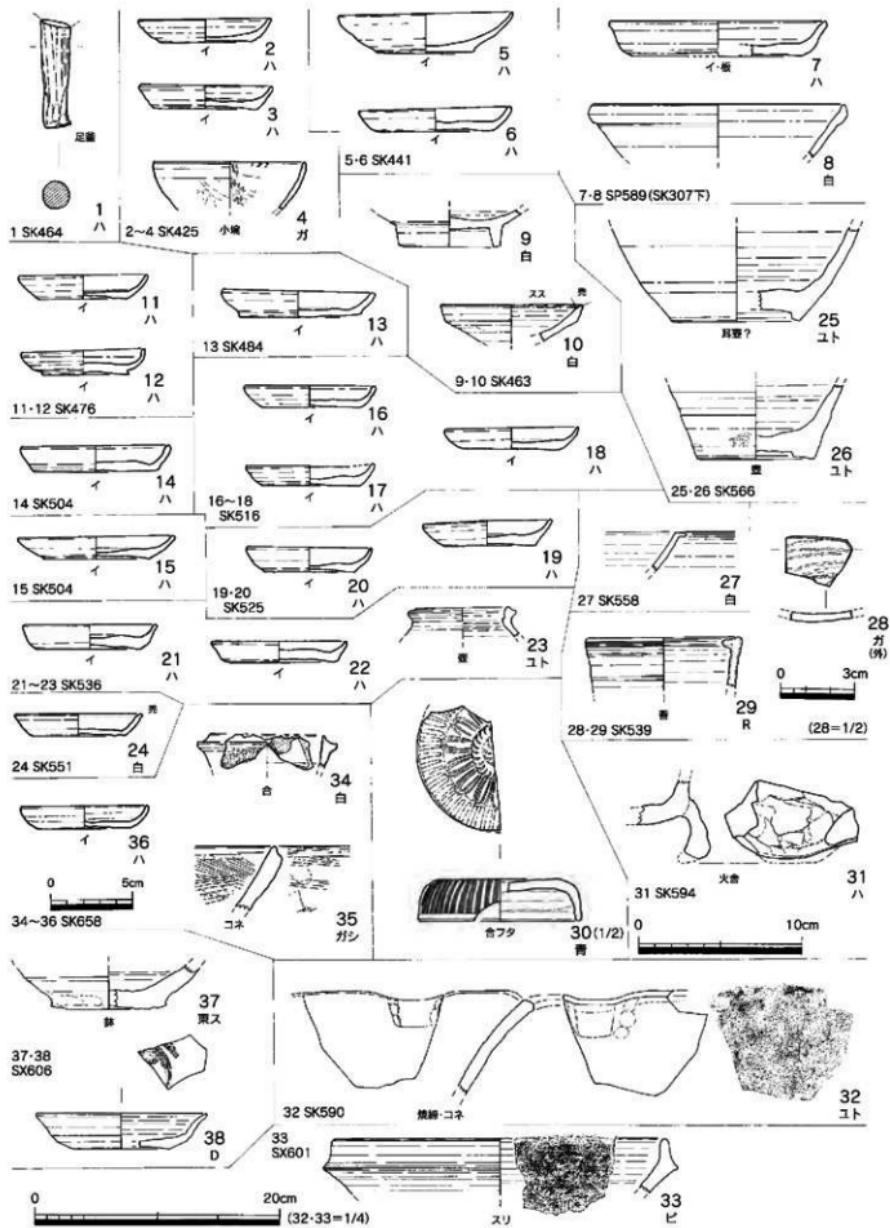


Fig.35 遺構出土中近世土器・陶磁器実測図IV (1/3, 一部1/2・1/4)

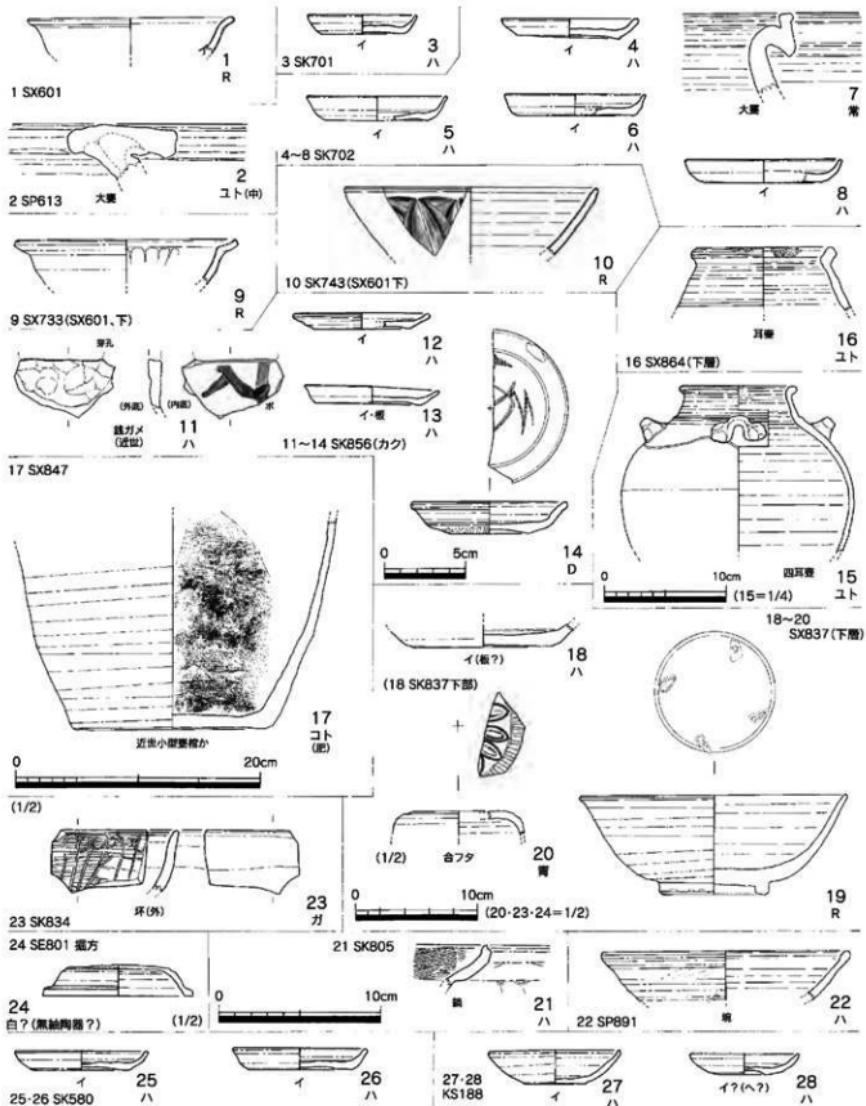


Fig.36 遺構出土中近世土器・南磁器実測図V（1区東半2面・II区遺構）(1/3,一部1/2・1/4)

型深鉢状。口径57.1cm、器高61.1cm、底径33.0cm。にぶい橙色～にぶい黄橙色。器壁の中央は褐灰色～にぶい灰色で、瓦質土器の焼成に近い。外面上位の一部に黒斑がある。内外面に粘土帶積上痕の

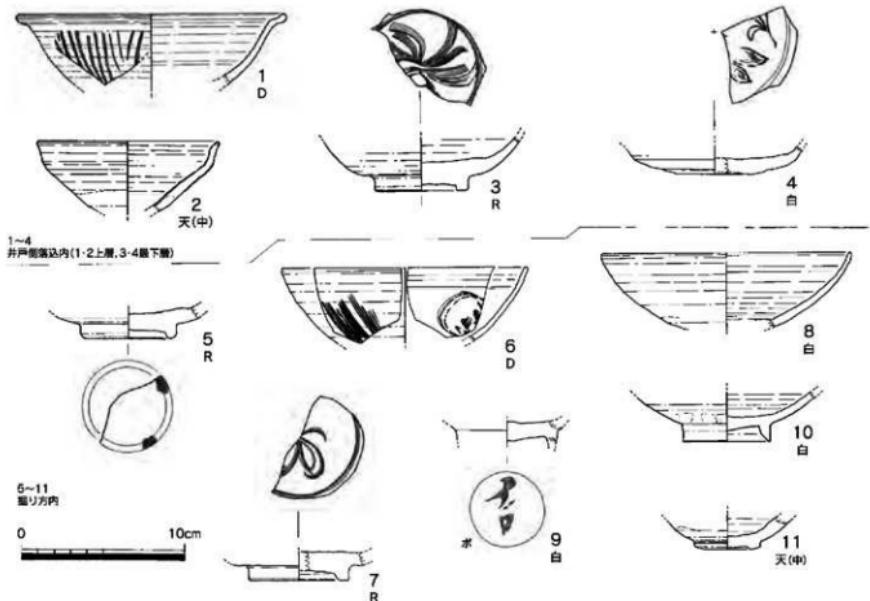


Fig.37 SE801出土陶磁器実測図I (1/3)

四凸が残り、外面体部上半や口縁部直下の積上痕はヘラで刻んだような明瞭な亀裂が残る。内外ハケメ仕上げ、内面下位はハケメ→ユビナデ→中位以上ハケメ仕上げ。内底はハケメ。底部外面立ち上がりは横にケズリ。外底は回転糸切り(?)の後、ヘラ工具調整。口縁部は板状工具ヨコナデ。類例は少ないと、土師器小皿(坏B7)の年代観から18世紀代。調査区内の陶器甕より古いと予測する。

2 土器、陶磁器、瓦 (Fig.32~44)

挿図中に基本的な遺物の種類などを下記の凡例のように略号で注記した。出土遺構も挿図中に示している。また遺構の報告において、川土遺物についてすでに記述している場合がある。そのため以下では紙幅の都合もあり、特記すべきものについてのみ部分的に記述する。なお近世陶磁器はあまり図化していない。遺構の多くは土礫墓と考えられるが、副葬品と推定できる完形品が近世陶磁器に少ない理由による。土師器坏皿は完形品が多く(2個一組が多い)、その場合副葬品の可能性が高く、図化しないと時期(型式)判別が難しいこともあり、その図化を優先した。一方、同じ遺構から出土した近世陶磁器片の検討が不十分となっており、今後の課題である。また中世遺跡が調査区にあったことを示すため、近世遺構出土の中世遺物も意図的に選択して図化していることを断っておきたい。

<凡例> (Fig.32~44, 47, 51)

「I」=土師器・土師質土器、「イ」=底部(凹版)糸切り/「複」=複目圧痕/「ヘ」=ヘラ切り/「白」=白磁/「青」=青磁/「R」=龍泉窯系青磁/「D」=同安窯系青磁/「青白」=青白磁/「染」=染付(青花)/「天」=天目/「ソ」=象嵌青磁(高麗~朝鮮)/「粉」=粉青沙器(新鮮、一部ペトナム)/「G」=綠釉/「黒」=黒釉/「ユト」=輸入陶器(※特に注記がない場合は中国産陶器)、「中」=中國陶器、「朝」=朝鮮陶磁、「ライ」=高麗陶磁/「焼締」=焼締め陶器/「ペ」=ペトナム陶磁/「コト」=國產陶器/「肥」=肥前系陶磁/「高」=高取系陶器/「ガ」=瓦器/「ガシ」=瓦質土器/「儀」=備前焼/「常」=常滑焼/「ス」=須恵器/「中ス」=中世須恵器/「東ス」=東播系須恵器/「外」=外来系(※土師器・瓦器で他地域産入品)、「合」=合子/「耳」=耳型/「パン」=盤/「番」=番炉/「茶」=茶入器/「壳」=口ハグ/「灯」=灯明皿/「コネ」=捏ね跡/「スリ」=擦り跡/「ボ」=墨書き/「平」=平瓦/「丸」=丸瓦/「カク」=撲乱

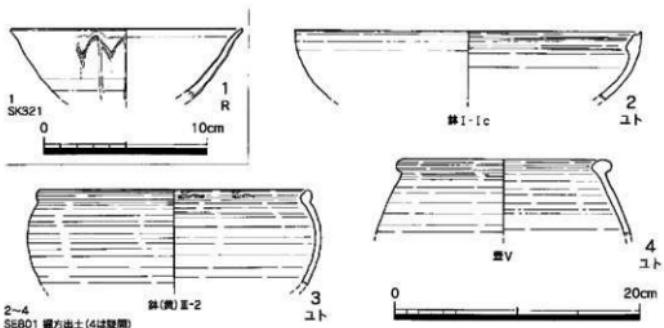
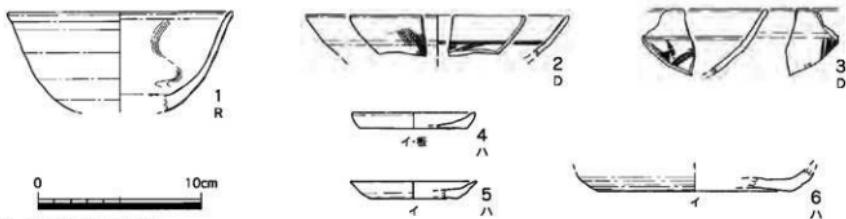


Fig.38 SE801出土陶磁器実測図Ⅱ (1/4), SK321出土陶磁器実測図補遺 (1/4)



(5=Ⅱ区出土, 他はⅠ区出土)

Fig.39 SD802出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

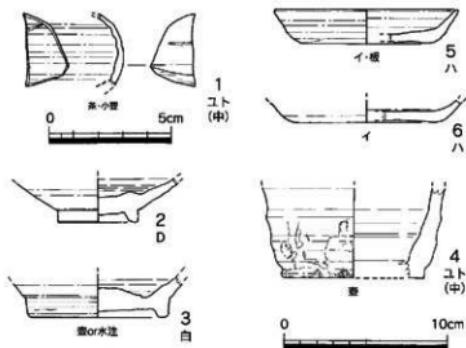


Fig.40 SX830出土土器・陶磁器実測図 (1/3,一部1/2)

18世紀後半(末)～19世紀前半。5～7が比較的新しいだろう。11は高取焼系の壺。人形状の浮彫あり。22～26は擾乱SX064とSK375出土だが、中世前半期の遺物が多くSK375は13世紀頃の可能性がある。26の土師器壺は13世紀後半。(Fig.33) 14の白磁小塊は邵武窯系で、明代(15世紀)のもの。30の土師器小壺は19世紀前半か。(Fig.34) 7は12世紀後半の土師器壺。16の粉青沙器はペトナム陶磁の可能性があるが不明。29～31は13世紀前半のセットで、擾乱以前の遺構が存在したか。

なお、土器・陶磁器の分類と編年は下記①～④を参照した。陶磁器は①(太宰府分類)を基本とし、②(博多分類)で補った。近世の肥前系などの国産陶磁器は③による。土師器壺皿類は、楠瀬慶太2007(前掲)を参照した④。

① 太宰府市教育委員会編2000「太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編」太宰府市の文化財第49集／②-a 福岡市教育委員会編1984「博多出土貿易陶磁分類表」福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 別冊／②-b 佐藤一郎1996「輸入陶磁器」「博多遺跡群出土器物資料集成」博多研究会／③ 九州近世陶磁学会編2000「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会10周年記念

(Fig.32) 1～9の甕棺内出土土師器は

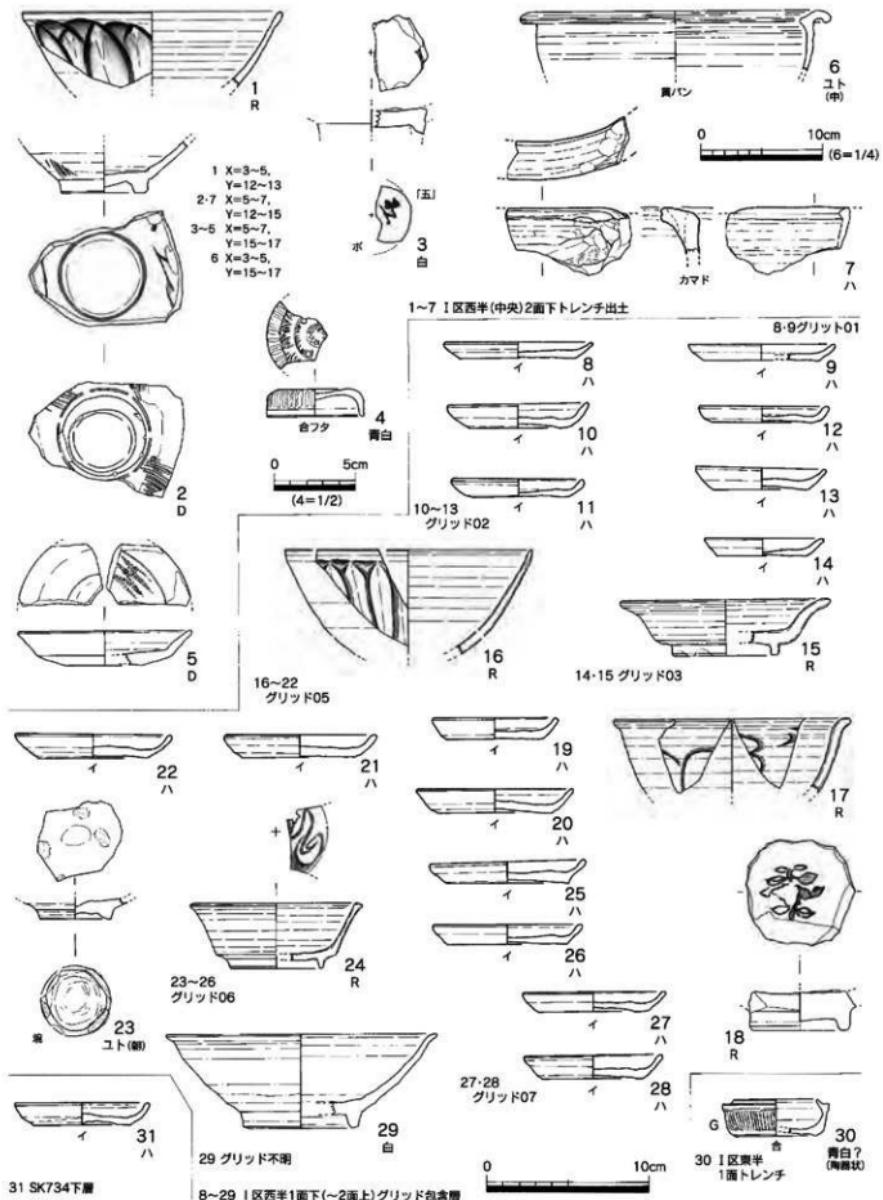


Fig.41 I区1面以下トレンチ・包含層グリッド出土土器・陶磁器実測図 (1/3, 一部1/4)

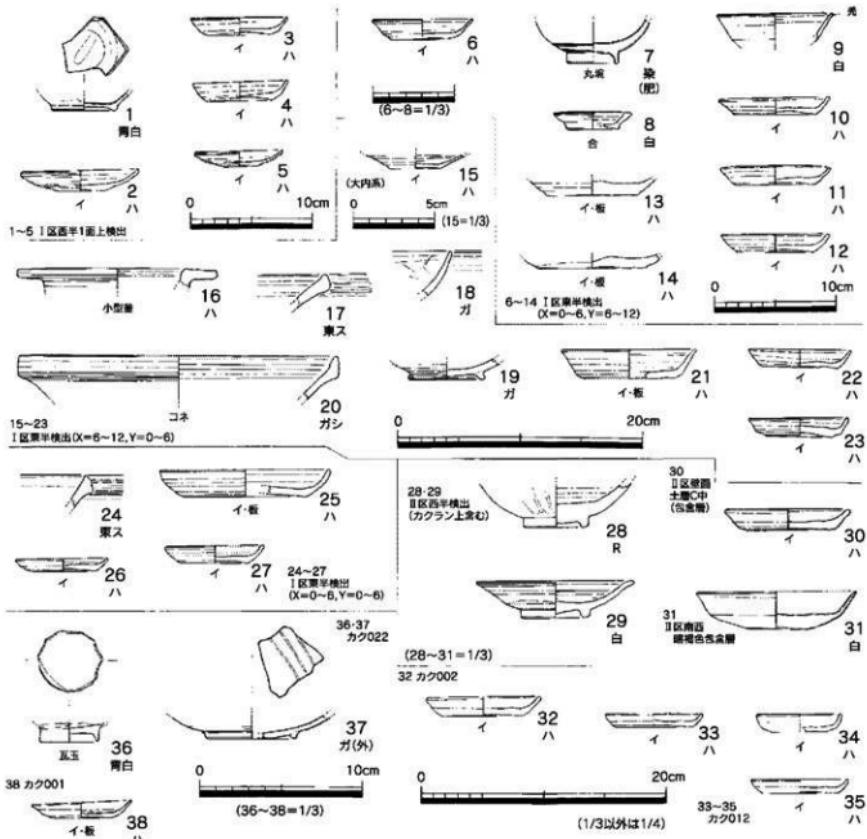


Fig.42 I区・II区1面検出時および搬乱出土土器・陶磁器実測図 (1/3, 1/4)

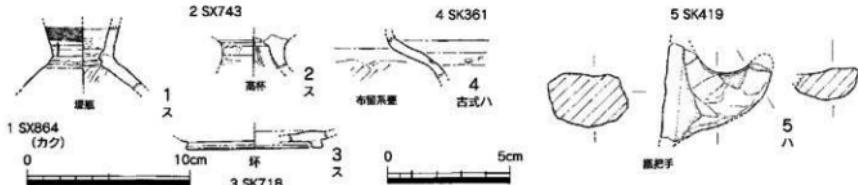


Fig.43 古代以前の土器実測図 (1/3)

(Fig.35) 4は小型の瓦器塊、搬入か。25・26はいずれも13世紀代の陶器壺。7・8は12世紀代。出土遺構自体は近世の可能性があるが、中世遺物は同時期遺物がまとまって出土する傾向がある。(Fig.36) 17は陶器壺棺。11は上部器の鉢瓶(貯金箱)の底部。近世。24は白磁の粗製品か。(Fig.37)

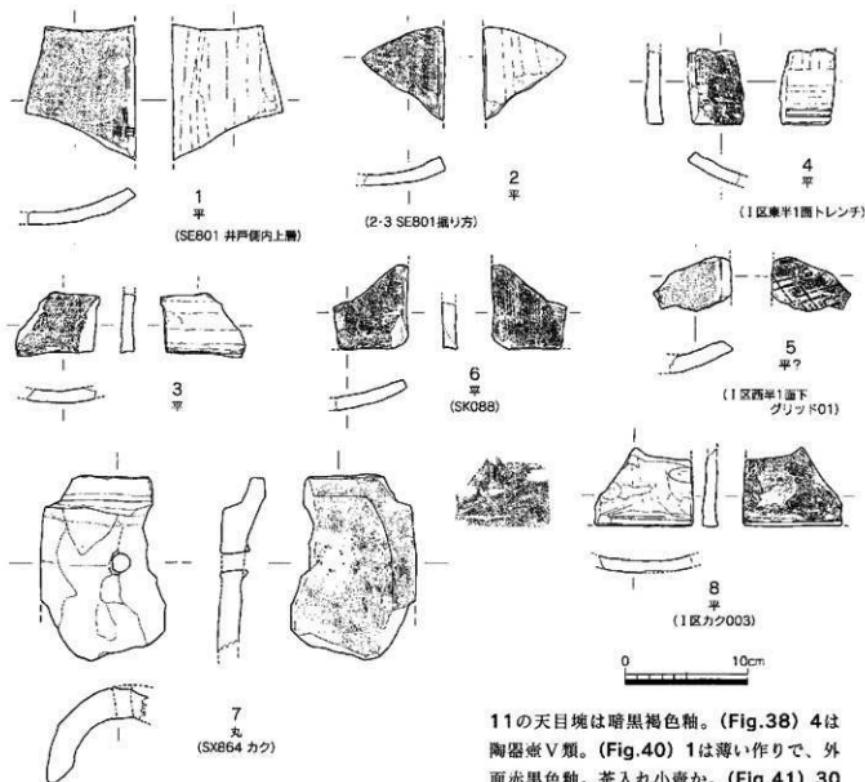


Fig.44 箱崎62次出土中世瓦実測図 (1/4)

可能性。(Fig.43) 1~3の須恵器のうち、1は7世紀、2は7~8世紀、3は8世紀。4は古式土師器の甕。5は7~8世紀の土師器。4·5は摩滅し、他も遺構に伴わない混入品であろう。箱崎遺跡の東側砂丘列から土砂とともに運ばれるなど、埋め立てに伴う客土中に含まれていたものか。瓦類は2箱程度出土し、中世瓦の一部を図示したが(Fig.44)、他に博多に多い押圧文軒平瓦が2片ある。瓦の出土は比較的少なく、妙徳寺の伽藍は調査範囲直近までは及んでいなかったとも考えられる。

3) 金属製品 (銅製品・銅錢、鉄製品ほか)

金属製品のうち、銅錢や鉄製品は互いに銹着して物理的に分離しがたいものもあり、また六道銭や複数種の金属製品が互いに絡み銹着しているものは、その状態に意義を見出しても分離していない場合がある。また和銖や毛抜などが互いに銹着している場合、櫛や梳き櫛あるいは棺材の一部が銹着して木質が遺存する場合もある。鉄製品は一部を銹取り処理し、図示した(Fig.45~47)。鉄製品どうしや銅錢や櫛などと銹着している場合など、銹膨れにより外形線が不明なものが多く、X線写真も参照したが図は推定と模式化部分が多い。鉄製品は図示したものや表6以外にも数多くある。近世土壤墓の副葬品となる和銖、毛抜、刀子が他にもあるが、銹取り未処理のものは図化していない(報告

11の天目焼は暗黒褐色釉。(Fig.38) 4は陶器壺V類。(Fig.40) 1は薄い作りで、外面赤黒色釉。茶入れ小壺か。(Fig.41) 30は緑釉陶器状であるが、青白磁の失敗品の

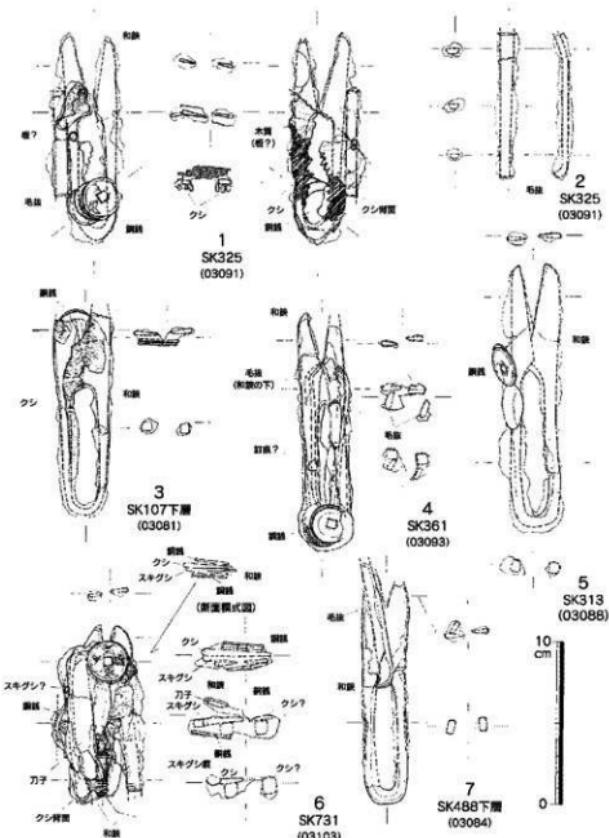


Fig.45 箱崎62次出土金属製品実測図 I (1/3)

は(表7・8)、近世の寛永通寶が大半であるが(Fig.49)、一部に中国錢である。一部に古寛永(1697年以降)の字体が大部分だが、一部に古寛永(1636~1659年)の字体や、一般的な新寛永よりや古い「文」銭(1668~1683年)のものがみられる。複数枚出土の場合、銹着して錢種不明のものも多いが、土壌墓への副葬(六道鉄)は、一部が17世紀後半に遡る可能性も留保される。ただし、基本的には新寛永を含むのが大半であり、本遺跡では18世紀以降と見ておくのが確実か。枚数に異動がある場合もあるが、六道鉄は文字通り「六枚」セットを基本とする場合が多い。さらに複数枚の錢塊の場合、周囲に布目痕(織維痕)が認められることが一般的である。

4) 有機質遺物

鉄製品(和鉄、毛抜ほか)などの金属遺物に銹着して、土壌墓の副葬品としての櫛、すき櫛(梳櫛)があり、また棺材痕跡の木質が付着遺存する場合がある。陶器甕棺内や近世土壌墓の一部(SK701の

遺物については、これらが出土している場合は記述した)。木桶(木櫃)と関係する鉄釘が多くあるが、整理途上であり、今回は一切を割愛している。

銅製品は表6、鋼鐵は表7・8にまとめた。銅製品は煙管(SK702のみ固化、Fig.46)以外の多くは固化した(Fig.47)。煙管は甕棺から多く出土し、比較的新しい時期に一般化する副葬品か。銅錠(臥錠)は仏具の打楽器で、鋳造品であろう(Fig.46-3)。脚(台)部が3箇所あるが一体鋳造か。ほぼ正円の体部である。鋼鏡(柄鏡)は近世の和鏡で、中央に四菱文、その周囲に連弧文(六花文)がある(Fig.46-4)。X線写真により銘文が判明し、一部不鮮明(型崩れ?)だが、「天下一藤原作」(または「天王藤原作」?)と読める(PL.12-14)。表裏に布目痕跡あり。また近代の擾乱出土であるが、金銅製の小佛像(台座から頭部まで7.2cm高)が出土しており、参考に紹介する(PL.4-11)。銅鏡(14枚?)がある(Fig.48)。

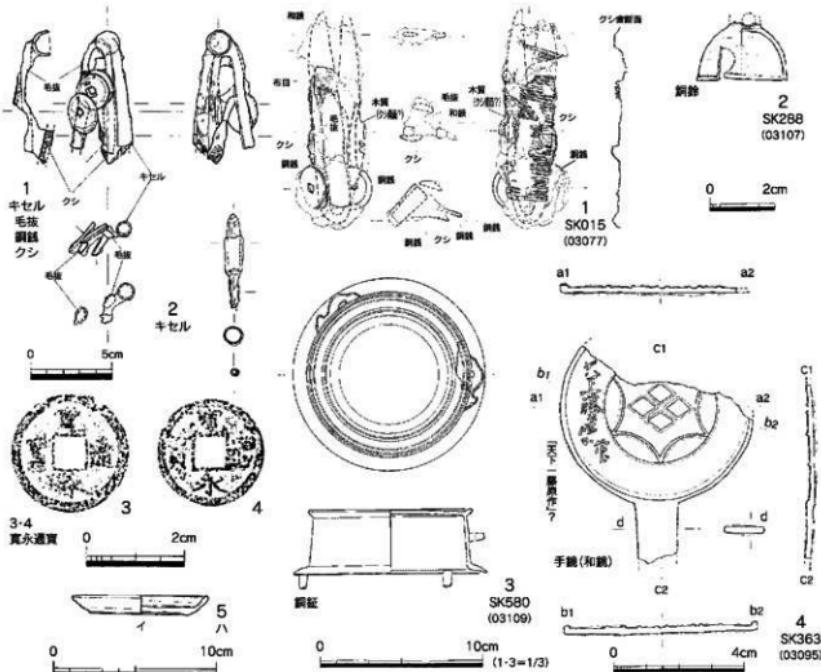


Fig.47 SK702出土金属製品・土器 (1/3, 銅鏡は1/3)

Fig.46 箱崎62次出土金属製品実測図Ⅱ (1/3, 銅鏡・銅鏡は2/3)



Fig.48 箱崎62次出土中国錢貨拓影 (1/1)



PL. 1 1. 調査区空撮全体写真（合成写真・上が東）



1. I区西半2面遺構調査状況（北東から）



2. SK362近世土壤墓出土状況（西から）



3. SK362遺物出土状況近景（北から）



4. SK580近世土壤墓出土状況（南から）



5. SK580遺物出土状況近景（西から）



1. SK702近世土壤墓出土状況（北西から）

2. SK702遺物出土状況近景（南西から）



3. SK363近世土壤墓出土状況（北から）

4. 落込みSX830土層断面（北から）



5. I区西半中央2面下トレンチ土層断面（北東から）

6. I区東半1面下トレンチ北壁土層断面西側（南から）



7. I区東半1面下トレンチ北壁土層断面中央（南から）

8. I区東半1面下トレンチ北壁土層断面東側（南西から）



1. SK363出土和鏡 背面 (Fig.46-4)



2. 同左, 表面 (布目痕頭著)



3. 和鏡表面一部拡大



6. 銅錢塊 (六道錢) 側面纖維痕 (3013) 7. 銅錢塊 (六道錢) 表面纖維痕 (3051)



8. SK362出土銅錢+和鏡 (布目痕)



5. SK580出土銅製臥鏡 (Fig.46-3)



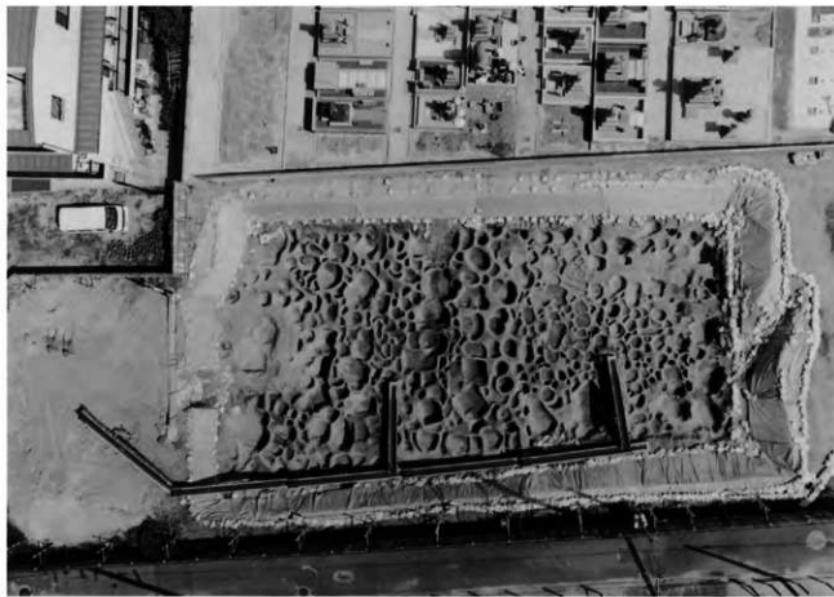
10. K181出土銅製鉢 (46-2)



9. SK702出土キセル・毛簾・銅錢 (47-1)



11. 捜乱001出土鍍金銅製小仏像 (不動明王像か)



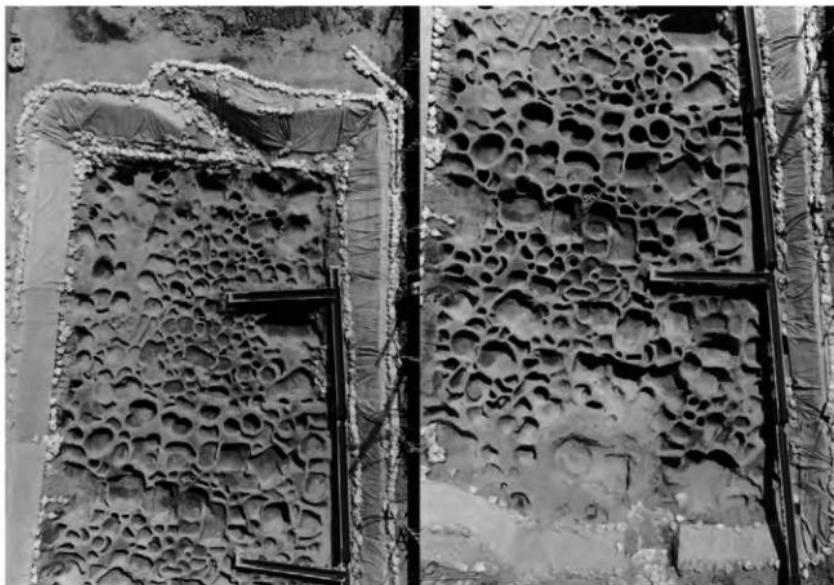
1. I区(1面)調査状況全景(空撮)(上が南)



2. I区調査状況遠景(空撮)(西から)



3. II区調査状況遠景(空撮)(西から)



1. I区 (1面) 東半調査状況 (空撮) (上が東)

2. I区 (1面) 西半調査状況 (空撮) (上が東)



3. I区 (1面) 中央調査状況 (Y=12~20) (北から)



1. I 区（1面）中央調査状況 ($Y=11\sim18$) (南西から)



2. I 区（1面）西部調査状況 ($Y=18$ 以西) (南から)



1. I区西半2面調査区中央～東側調査状況（北から）



2. I区西半2面調査区中央～西側調査状況（北東から）



1. I 区西半2面調査区中央～西側調査状況（南西から）（左下がSX601）



2. II 区調査状況全景（空撮）（上が南）



1. II区南半調査状況（左の溝はSD802）（南東から）



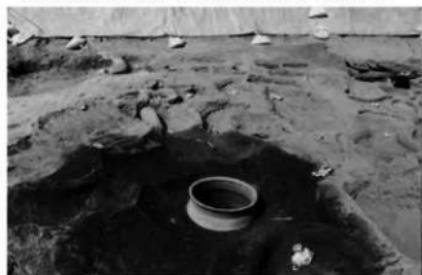
2. II区調査状況全景（西から）



3. II区土層D（西から）



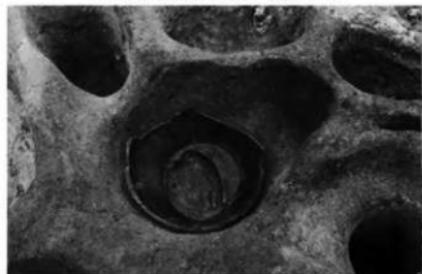
4. II区土層A（南から）



5. ST001臺棺検出状況（北東から）



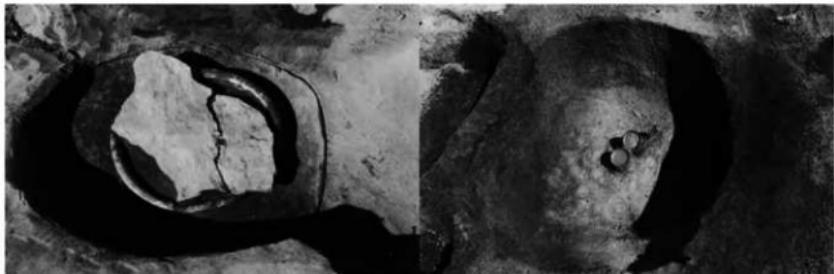
7. ST019臺棺墓検出状況（南東から）



6. ST031臺棺出土状況（南から）

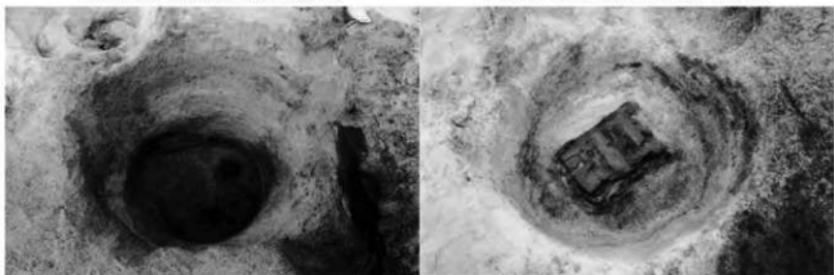


8. ST019臺棺内掘削状況（桶板？検出）（南西から）



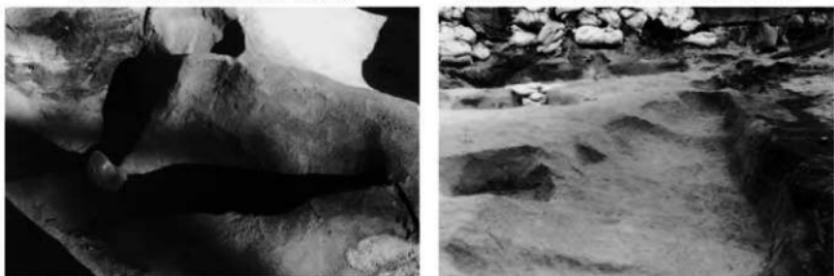
1. ST845近世甕検出状況（南から）

2. SK361近世土壤出土状況（西から）

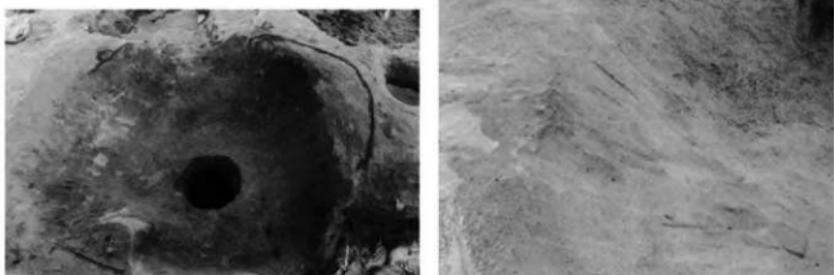


3. SK321近世土壤出土状況（南から）

4. SK701近世土壤木桶底板出土状況（東から）



5. SK837中世土壤出土状況（北西から）



6. SE801井戸側落込み検出状況（北から）

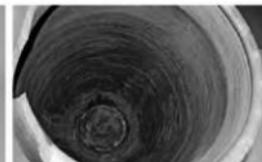
7. 落込みSK837完掘状況（北から）



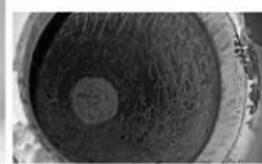
1. ST001近世陶器壺棺 (Fig.28)



2. ST019近世陶器壺棺 (Fig.29)



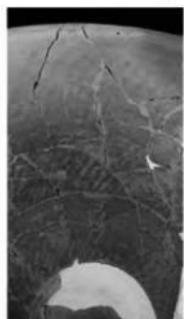
3. ST019陶器壺棺内面



4. ST845陶器壺棺内面



6. ST031近世土師質壺棺 (Fig.31)



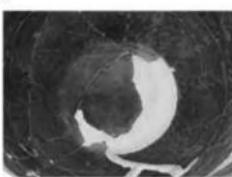
7. ST031壺棺体部内面



5. ST845近世陶器壺棺 (Fig.30)



9. ST031壺棺底部付近外面



8. ST031壺棺底部付近内面



10. SK881出土四耳壺 (Fig.36-15)



14. SK362出土近世和鏡X線写真



12. SK334出土肥前系陶器碗
(Fig.51-1)



13. SK281出土肥前系陶器碗
(Fig.51-2)

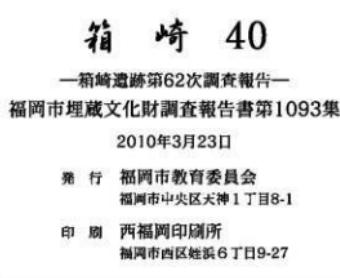


11. ST006壺棺墓出土高取系壺 (Fig.32-11)

報告書抄録

ふりがな	はこざき40 ーはこざきいせきだい62じちょうさほうこくー
書名	箱崎40
副書名	—箱崎遺跡第62次調査の報告—
卷次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1093
編著者名	久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	西暦2010年3月23日

遺跡名ふりがな	はこざきいせきだい62じちょうさ			
遺跡名	箱崎遺跡第62次調査			
所在地ふりがな	ふくおかしひがしくまいだし5ちょうめ31ばんちほからない			
遺跡所在地	福岡市東区馬出5丁目31番地内地内			
市町村コード	40130			
遺跡番号	2639			
北緯	33度36分50秒(世界測地系)			
東經	130度25分12秒(世界測地系)			
調査期間	2010.7.15~2010.10.15			
調査面積(m ²)	693.24m ²			
調査原因	道路建設			
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
墓地、集落	平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代	土坑・ピット400以上(中～近世、大部分は近世土塙墓、一部中世土坑・土塗墓あり)、近世甕棺墓30以上、井戸1(中世)、溝状遺構5、落込み遺構	土師器・瓦器・瓦質土器(中～近世)、輸入陶器(中世)、国産陶器(中～近世)、瓦(中～近世)、銅錢385枚(大部分が近世銭)、銅製品(鏡、風鏡、鉢、キセル)、小仏像(ほか)、鉄製品多数(和鉄・毛抜・釘はほか)、ガラス玉、有機質遺物(櫛、櫛柄板材、井戸桶板)、人骨、動物遺存体	近現代に統く墓地区画下層の近世墓群(近世後期以降は甕棺墓群、近世前～中期は密集した土塙墓群を形成)、一部の近世土塙墓に多数の副葬品(土師器皿+銅錢、銅製品、鉄製品)、中世は集落の一部(12世紀以降中世都市の縁辺部)、性格不明の大型落込み遺構(中世の掘り込みか)



蓄層標列	術	段
540	2	3

5



E